

上越教育大学附属幼稚園 平成24年度研究開発学校実施報告書（要約）

1 研究開発課題

幼稚園教育と小学校教育の接続期におけるリテラシーの基盤形成に向けた学習者の学び合い、支え合う協同体の育成を目指すカリキュラムと指導方法等の研究開発

2 研究の概要

本研究は、幼児の主体性を活かした学び合い、支え合いを重視した接続プログラムを開発し、幼児期後半にみられる発達の特徴を踏まえ、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図る教育課程や指導法の開発を目的とした。研究過程において、幼小の円滑な接続には、接続期のみならず3年間の充実した保育が重要であることを再認識した。そこで、学びの基盤となる力の育成やリテラシーの基盤形成を図る3年間の教育課程の編成、展開、指導法に焦点づけ、研究を深めた。

具体的研究内容

- ① 幼稚園教育と小学校教育の「接続期」の設定
- ② 幼児の主体性を活かした学び合い、支え合いを重視した接続プログラムの開発
- ③ 小学校からの学びの基盤となる力を整理し、それらを育む保育を事例から検討
- ④ 小学校の教科学習の基礎であるリテラシー（言語・数量・科学）の基盤形成に焦点化した教育課程の編成と指導法の開発
- ⑤ リテラシーの基盤形成にかかわる幼児の発達の姿の整理
- ⑥ 研究開発とその実践に対する多面的な検証方法の開発及び分析・考察

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

本研究では、以下の仮説から、リテラシーの基盤形成に向けた学習者の学び合い、支え合う協同体の育成を目指すカリキュラムや指導方法等の研究開発を行った。

- ① 子どもの発達や意識に寄り添って設定された接続期において、主体性の育ちを基盤とした協同的な育ちを一層促す経験やみんなでやり遂げるおもしろさ、達成感・成就感等を感じ得ることで、学び合い、支え合うことができるまとまりのある集団を形成し、クラスの仲間意識や協力し合う姿勢をも養うことができる。
- ② 遊びの中で様々な事物を扱う経験を積み、同年齢や異年齢の幼児との多様なかわりを経験することで、自己有用感と積極的な態度が育つ。また、好奇心、探究心に支えられたリテラシーにかかる新しい経験や活動にも、意欲をもって取り組む姿勢をはぐくむことができる。さらには、自分の思いを言語や非言語コミュニケーションによって豊かに表現することができるようになる。
- ③ 接続期及び3年間の様々な体験を通じて、小学校生活や小学校の学びへの見通しをもつことにより、学習集団の形成に向けて自己発揮する姿を生み出すことができる

（2）教育課程の特例 なし

4 研究内容

（1）教育課程の内容

<小学校からの学びの基盤となる力>

これまでの本園の研究の成果から、「小学校からの学びの基盤となる力」として、7つの力を整理した。これらの力は全ての学びの土台になると考えている。

- 好奇心・探究心 … 自分のまわりの事物や事象に対する気付きや感性
- 主体性 …………… 様々なことを自分でやろうとする心情や意欲・自信
- 自立・自律 …………… 生きるために必要な基本的生活習慣等を身に付けること
状況を判断し適切な行動をとれるようになること
- 伝え合う力 …………… 興味をもって活動する中で、気付いたことや自分の思いを人に伝えたり相手の話を聞いたりすること
- 社会性 …………… 所属する社会（幼稚園）の文化や規範、あるいは習慣が分かりそれに順応して行動すること
- 協同性 …………… 互いに仲良くすることからさらに進んで、互いに配慮して分担し、さらに活動の進展に伴いやりとりを重ねて共通の目的を達成していくこと
- 見通しをもつ力 …… 先のことを考えて適切な行動をとること、相手の気持ちを察して適切な言葉かけや働きかけをすること

<本園が焦点付けて研究した「リテラシーの基盤」の内容>

小学校からの教科学習につながるリテラシーの基盤を言語、数量、科学に焦点付け、それらを意味付けた。

●「言語リテラシーの基盤」 … 言葉や文字への関心・感覚や気付き

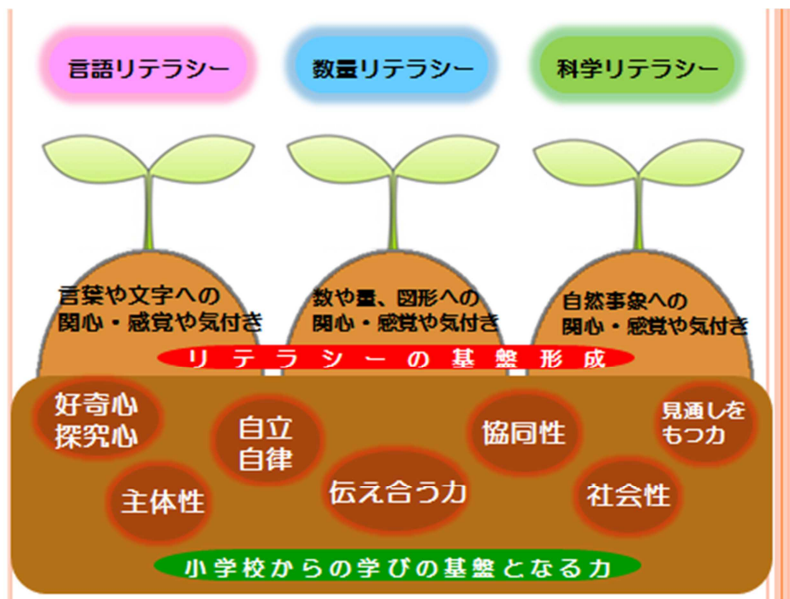
幼児は、ものやことへの気付きを自分の言葉で他者に伝えようとしたり、友達とやりとりをしたりして、言語感覚を豊かにしていく。また、遊びの中で文字に触れ、文字を覚えたり読んだりしていく。さらには必要に応じて、線や文字、記号を書いたり使ったりする。経験を伴って語彙を習得し、言葉による表現力を獲得していく。

●「数量リテラシーの基盤」 … 数や量、図形への関心・感覚や気付き

幼児は、様々な遊び道具や材料を扱うことを通して、形や大きさ、長さ等への気付きを深めていく。友達との遊びや生活の中で、ものの数をかぞえたり分けたりする活動を通して、数への関心を高めたり大きさや量の感覚を獲得したりしていく。

●「科学リテラシーの基盤」 … 自然事象への関心・感覚や気付き

幼児は、身近な動植物に直接触れたり、季節の変化を体感を伴って感じたりして感性を豊かにしていく。また、遊びを通して自然事象の不思議さや多様性、身の回りのものの性質やしぐみに気付いていく。



<接続期の設定>

「幼稚園生活で培ってきた力や育ちが、いっそう確かになるような経験を意識的に重ねていく時期」として本園独自の接続期を以下のように設定した。

幼稚園											小学校		
3歳クラス				4歳クラス				5歳クラス			1年生		
I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期	IX期	X期	XI期	XII期		
								4～5月中旬	5月下旬～7月	9～12月	1～3月	4～5月上旬	
										←	→	接	続
												期	

<接続プログラムの全体計画>

「接続期」においては、「接続プログラム」を作成し、それに基づいた保育実践を重ねた。

- 子ども向けプログラム
 - ① リテラシーの基盤形成に着目したプログラム
(遊び・みんなでかかわる活動・生活行動)
 - ② 小学1年生との計画的な交流活動のプログラム
- 保護者向けプログラム
 - ③ 保護者向けプログラム

<3年間を見通した生活時程とそれぞれの年齢クラスにおける教師の援助>

各年齢クラスのおおよその生活時程と教師の援助等について、これまでの研究の成果から再検討し、整理した。

<発達の姿の整理>

言語、数量、科学のリテラシーの基盤形成にかかわる幼児の発達の姿を、これまでの実践や研究成果等から、3歳クラス、4歳クラス、5歳クラス前期、接続期の4つの時期別に洗い出し、一覧にまとめた。これは、教師が保育をする上で援助の指標となり得る。

(2) 研究の経過

◇ 1年次の主な研究内容

研究副題「接続プログラムと指導方法等の開発に焦点付けて」

- ・小学校以降の教育を支える「幼児期に育てたい力」の明確化
- ・幼稚園教育と小学校教育の「接続期」の設定
- ・言葉による伝え合いに着目した「接続プログラム」の作成及び保育実践
- ・3年間の「生活時程」の見直しと教師の援助の整理
- ・各年齢クラスの幼児の学びにかかわる事例の収集及び分析

◇ 2年次の主な研究内容

研究副題「接続プログラムの検証・改善と3年間の保育の充実」

- ・多様な検証方法の開発、検討と実施
- ・本園の修了児と在園児を対象にした接続プログラム及び保育実践の検証
- ・小学校の教科学習につながるリテラシーの基盤形成に必要な内容の明確化
- ・リテラシーの基盤形成に着目した接続プログラムの改善
- ・各年齢クラスの幼児の学びにかかわる事例の収集及び分析

◇ 3年次の主な研究内容

研究副題「幼小をつなぐカリキュラムと指導方法の提案」

- ・2年次に実施した検証方法の改善と実施
- ・幼児の学びにかかわる事例やリテラシーの基盤形成につながる事例の収集及び分析
- ・リテラシーの基盤形成にかかわる幼児の「発達の姿」の整理
- ・具体的な教師の援助と環境構成の工夫の整理
- ・本園の修了児と在園児を対象にした本研究の検証
- ・3年間の研究成果を踏まえた新教育課程の作成

(3) 評価に関する取組

<小学校入学後の修了児の追跡調査>

a 附属小学校1年生の観察（入学～5月上旬）

接続期後半の5月上旬までの1年生の姿を大学の先生方（運営指導委員）や幼児教育コースの大学院生、学部生の力を借りて観察し、分析した。

b 公立小学校1年生の担任からの情報収集（5月中旬）

本園から附属小学校以外の公立小学校に入学した修了児については、5月中旬（接続期終了後）に、学校生活の様子を学級担任にたずねた。また、5歳クラスの担任は、小学校の学習参観や情報交換会へはできるだけ出向き、それぞれの修了児の学校生活について見たり聞いたりした。

c 接続期終了後の保護者アンケート（5月下旬）

修了児の保護者に、小学校入学後の修了児の様子をアンケート調査した。

d 附属小学校1年生担任との情報交換（随時）

附属小学校1年生担任とは、いろいろな形で情報交換を行った。

e 附属小学校1年生の担任による評価（7月下旬）

本園が整理した「小学校からの学びの基盤となる力」に関する質問事項に対し、附属小学校1年生担任より、全1年生を対象に4段階評価をしてもらい、それを運営指導委員の協力のもとで分析した。

f 附属小学校1年生が1学期に書いた作文の分析

附属小学校の1年生が1学期に書いた作文（平成23、24年度分）を現在、運営指導委員の協力のもとで分析している。

<在園児の学びに関する評価>

a 在園児の数量に関する調査

全在園児を対象に計数、図形、数の合成分解等に関する実態を、運営指導委員と幼児教育コースの学部生の協力を仰ぎ、面接法で調査、分析した。

b 「幼児の育ち」に関する保護者アンケート（各学期）

「リテラシーの基盤形成」と「小学校からの学びの基盤となる力」に関して、保護者から見た我が子の成長を記述法で調査した。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 幼児・児童への効果

- ・「附属小学校1年生の担任による評価（7月）」の分析結果より、修了児は主体性、伝え合う力、社会性、協同性、集中性において、他の幼稚園や保育所出身者より高い評価を得られた。昨年度の同じ調査では社会性と協同性が高い結果であった。従って、昨年度よりも今年度の方が、多くの観点で高い評価が得られ、研究の成果が上がっていると考えられる。
- ・本園の修了児は入学した各小学校において、自分らしさを発揮して学んでいる。教科学習において、積極的に自分の考えを発言したり建設的な提案をしたりしている。話し合いや活動をリードする修了児が多く、小学校入学後も、自己発揮できていることが分かった。これは、本園職員、運営指導委員、大学学部生・院生等の観察結果と各小学校クラス担任からの情報に基づいている。以下に具体的考察を示す。

<運営指導委員による附属小学校1年生の観察後の考察より>

- ・入学後すぐの附属幼稚園修了児は、小学校の基本的な生活のルールなどを率先して覚えようとしたり、他園修了児にそのルールを教えてあげようとしたりして、附属小学校での生活に積極的に溶け込もうとしていた。
- ・附属幼稚園修了児は、様々な活動で、附属幼稚園で経験した自然や遊びなどについての知識を他の子どもに教えてあげたり、それをもとに活動を工夫しようとする様子が見られた。
- ・附属幼稚園修了児が、話し合い場面において、幼稚園での経験を豊かに語っている様子がとても印象的であった。
- ・幼稚園の子どもたちが小学校でのびのびと楽しみながら、また堂々と意見を言っている様子にすっかり感心してしまった。
- ・他園出身児童には、「先生できました」「できた」などと自分ができることをアピールしたり、「先生、〇〇ちゃんが□□で…」と他の児童への注意を先生に依頼したりといったように、先生に認めてもらおうとがんばっている印象を受けた。早期から他者からの評価を意識しながら活動に取り組む児童がいる。一方、あくまで印象ではあるが、附属幼稚園修了児にはそういった傾向はあまり見られず、自分でできた喜びを感じ、課題に夢中になり、他人との比較は二の次で、課題に純粹に取り組んでいるように感じた。

<本園職員による附属小学校1年生の観察後の考察より>

1年1組 「牧場主からの手紙を元に、夏休みのヒツジの飼育について考える」授業
本園の修了児であるA児の発言

「今、いろいろな意見があるんだけど…（夏休みの間、羊さんを牧場に返すのは）本当に嫌だって思っている人がいるんですけど…。水鉄砲(ヒツジに水をかけて冷やしてあげる)はダメだし、プール(ヒツジを泳がせる、水浴びさせる)もダメだから、(ヒツジを)返していいけど、私もちよっぱり寂しいかな。」

A児が、最後にこのように発言して、1組の話し合いは終了となった。話し合いをまとめるようなA児の発言が他の児童の心に余韻を残した。

私は、A児が言った内容にも感動したが、話し言葉の順序立てにも感心した。

これが「私も寂しいけど、～返した方がいい」という言葉の並び順であったらどうであろう。聞く側の受けとめとしては、A児のヒツジを「返そう」という思いが強調され、ヒツジを「返したくない」児童が反論するであろう。しかし、「私も寂しい」と締めくくると、「そうだね。A児も寂しいんだ。ぼくも寂しいよ。みんなだってそう思っているんだね」と共感を呼び、それぞれがもう一度自問自答することにつながるのではないだろうか。1年生のA児がそこまで考えて発言したとは思えないが、素直に「ヒツジへの思い」を最後に言いたくなったのであろう。それだけA児のヒツジへの思いが強いことを感じた。また、A児の「大好きなヒツジさんだけど、夏休みの間はヒツジさんのために飼い主の所に返した方がいいに違いない」という心の葛藤が読み取れた。

附属幼稚園では、幼児同士のトラブル場面などにおいて、教師は幼児に、相手に自分の気持ちを伝えられるように援助している。「パンチされて痛かったよ」「入れてって言ったのに、入れてくれなくて悲しかったよ」「〇〇ちゃん、困っているよ」などである。A児の発言には、そのような幼稚園での学びも活かしていることを感じた。

- ・附属小学校に入学した修了児は、「作文の中では豊かな語彙を用いて表現している事例が多い」と小学校クラス担任が評価している。これは、幼児期の自発的で豊かな遊びの経験が大きいのではないかと小学校担任が分析している。
- ・在籍幼児に対する数量に関する調査から、幼児の自発的な遊びを中核とした保育でも、数量等に関する基盤は十分培われていることが分かった。(資料3参照)
- ・教師がリテラシーの基盤形成を意識した援助や環境構成をしてきた結果、研究開発3年目においては、幼児の文字や数、量などへの関心や感覚、気付きがこれまで以上に高まっている様子が、保護者アンケートからも多く確認された。

※ここで具体的に述べることはできない。報告書の本文において事例で記す。

- ・一人一人の好奇心や探究心を大切にしながらも、みんなでやり遂げるおもしろさや達成感を感得する経験を積むことで、学級の仲間意識や協力し合う姿勢が高まっている様子が本園の5歳クラス児(接続期前半)と本園の修了児(接続期後半)に見られる。

※ここで具体的に述べることはできない。報告書の本文において事例で記す。

- ・異年齢幼児との多様なかかわりを経験する中で、5歳クラス児の自己有用感と積極的な態度が育ち、幼小の円滑な接続を促す一つの要因になっていると考えられる。
- ・接続プログラムである小学1年生との交流活動を通して、小学校生活への見通しをもち、小学校入学に向けた不安が解消され、期待へと変容している様子が見られた。小学1年生や幼児の主体性が十分に生きる活動を仕組み、教師が前面に出ることを

控えることで、児童及び幼児が活動意欲を高め、積極的に活動している。児童及び幼児の「やらされ感」や「お客様感覚」がなく、自分事として受け止めている。そのため本人の学びも大きい。

- ・交流活動は入学前の時期にのみ行うのではなく、5歳クラスの1年を通して計画的、継続的に行うことで、円滑な接続につながる。
- ・修了児の保護者に小学校入学後の様子をアンケート調査した。そのうち「附属幼稚園での経験や活動が活かされていると感じられたこと」という項目において、次のような記述があった。（一部抜粋、保護者の記述に沿って表記）
 - ・お菓子を分ける際、平等に（均等に）なるよう工夫していた。（残りの1つを半分にする、じゃんけんする、何もせず相手に譲る）
 - ・時計を見て（自分で決めた時刻に）行動している。
 - ・何事にも好奇心をもち、初めてのことでも積極的に取り組もうとしている。
 - ・家では文字を教えておらず、幼稚園の活動の中で書けるようになった。
 - ・身の周りにある材料を使い、自らのイメージするものを作り出すという繰り返しの作業が小学校での製作活動の中でも力を発揮する原動力になっていると感じる。

① 教師への効果

- ・指導案や週案、毎日の保育の振り返りに「リテラシーの基盤形成」にかかわる視点を加えて明記するようになった。この情報を園の全職員で共有することで、教師がリテラシーの基盤形成にかかわる幼児の学びについて関心を高め、リテラシーの基盤をはぐくむ援助や環境構成について、これまで以上に意識するようになった。さらには、各年齢の発達の姿を意識して、リテラシーの基盤をはぐくむ見通しをもった保育実践が可能となった。
- ・修了児の小学校での様子を、1年生の担任から教えてもらうことが増え、入学後の修了児への理解が深まった。具体的な事例から、学びのつながりや成長の姿をとらえ、教師の援助や指導方法を工夫するようになった。附属小学校の1年生担任との関係も密になり、互いに参考になると思われる情報を日常的に交換するようになった。
- ・「幼稚園時代に思いっきり遊んだことが、小学校での学習意欲につながっている」と附属小学校の1年生担任も分析している。幼稚園と小学校の教師の情報交換の効果は大きく、「幼児期の遊びの意義」について両者で再認識できた。さらには、小学校1年生の総合単元活動（上越教育大学附属小学校独自）の意義が再認識され、5歳クラス児と1年生との交流活動にもその活動が有効に働いた。
- ・幼小の円滑な接続を促すために、附属小学校の総合単元活動を中核にした教育課程のよさを実感した。また、緩やかな移行を心がけてきた1年生担任の姿勢も適切なものであったと考える。幼稚園と小学校の教師の互いの教育への理解が深まった。
- ・毎年実施している研究会には、上越市内を中心に、県内外から多くの参観者が訪れた。小学校や保育所、行政関係といった幼稚園以外の現場からも大勢の参観者があった。さらには、上越市の学校教育研究会との協賛による「保育について語る会」も広く案内し、幼小の接続における取組や課題について認識を広げることができた。幼児期における遊びの重要性について広く発信できた。

② 保護者等への効果

- ・研究に関する講演や説明会を開催する中で、保護者が、幼児期における遊びの重要性や幼児が必要感を伴って学ぶことの大切さを理解し、幼稚園教育に対して理解が深ま

った。

- ・附属小学校の行事案内を保護者に配付したところ、幼児を連れて参観に行く保護者が増えた。小学校に対する関心が高まり、理解が深まった。その参加率は年を追うごとに高くなった。

附属小学校運動会（6月）の参観率

40%（h23年度） → 60%（h24年度）

附属小学校ポプラ祭（10月）の参観率

60%（h23年度） → 71%（h24年度）

附属小学校休日参観及び学校説明会（11月）の参観・参加率

73%（h23年度） → 86%（h24年度）

- ・就学時健康診断が始まる頃から、5歳クラスの保護者はクラス担任に我が子の様子について積極的に尋ねたり、子どもと保護者の不安や心配事を包み隠さず相談したりするようになった。我が子の「幼小の円滑な接続」にあたっての意識の高まりがうかがえた。
- ・5歳クラスの保護者に対し、入学を控えた時期の子どもや保護者の実態調査の協力をお願いしたところ、記名式にもかかわらず全員から回収できた。保護者の園に対する理解と信頼の表れととらえている。
- ・本園の「保護者向け接続プログラム」の中にある附属小学校の参観や入学に向けての懇談会等を通して、入学前の不安が軽減され、明るく前向きな気持ちで我が子を小学校へ入学させることができおり、そのことが子どもの幼小の円滑な接続の一助となっていることが、保護者の感想から分かった。

本園を会場とした入学に向けての懇談会（2学期末）への参加率

56%（h22年度） → 81%（h23年度） → 95%（h24年度）

（2）実施上の問題点と今後の課題

- ・幼児期における豊かな遊びの経験が、小学校以降の確かな学びにつながっていることを多様な方法で検証することを試みた。幼稚園での遊びを通じた学びの成果は大きいと思うが、それらを数値化して検証するのはなかなか困難である。今後も大学や附属小学校と連携しながら、可能であれば試みてみたい。
- ・小学校1年生と5歳クラス児の交流活動の効果が、互いの子どもにとって意義深いものになるように、今後も小学校と幼稚園の教師が事前に十分な打ち合わせを行った上で継続して実施していく。
- ・小学2年生以上の修了児の姿から、本園での教育の成果を検証することは難しいが、今後検討できれば、なお本研究についての検証が確かなものとなるであろう。
- ・公立小学校に入学した修了児の様子については、就学先の学校より積極的、継続的に情報を得て、修了児の幼小の円滑な接続に向けて支援できることを模索していく。
- ・幼児教育における遊びの重要性やリテラシーの基盤形成にかかわる発達の姿や教師の援助等について、今後も広く発信していく。
- ・研究開発学校指定後も、開発した教育課程や接続プログラムを元に実践を重ね、幼児期の教育の充実とその重要性の発信に広く寄与していく。

リテラシーの基盤形成にかかわる <発達の様>

	3歳クラス												4歳クラス												5歳クラス												1年生	
	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	4	5			
	I期			II期			III期			IV期			V期			VI期			VII期			VIII期			IX期			X期			XI期				XII期			
																									幼小接続期													
リテラシーの基盤	仲間関係をはぐくむ経験内容	教師との信頼関係を築きながら、周りの友達の存在を知る	同年齢の友達の存在を知り、仲間入りのきっかけを知る	友達とかかわりながら、教師の言葉かけにより、相手の思いを知る	友達と思いを共有しながら遊ぶ	新たな友達と遊び、思いを伝え合う	友達とのトラブルを通して、相手の思いに気付く	葛藤経験を積み重ね、仲間とイメージを共有しながら遊びを広げる	他児のよさに気付き、認め合いながら遊ぶ	お互いの体験を共有し、仲間意識をもつ	仲間との競い合いを通して、互いを認め合う	思いを伝え合いながら、ルールをつくり出す	力を合わせて活動しながら、達成感を味わう																									
言語	話す・聞く	教師や友達に親しみをもって話したり聞いたりしようとする						したこと、見たこと、感じたことを教師や友達に親しみをもって、話したり聞いたりしようとする						「伝えたい」「知りたい」という思いをもって話そうとしたり聞こうとしたりする						「伝えたい」「知りたい」という思いをもち、分かりやすく話そうとしたり聞こうとしたりする																		
	伝え合う	教師の援助を得ながら思いや気付きを伝えようとする						教師の援助を得ながら、言葉を使って思いや気付きを伝えようとする						教師や友達に自分から思いや気付きを伝えようとする						気付きや思いを伝え合おうとしたり遊びがより楽しくなるように話し合おうとしたりする																		
	読む	教師が読む絵本や紙芝居などに興味をもち、喜んで見たり聞いたりする						文字に興味をもち、教師の援助を得ながら、言葉や文を読もうとする												文字に関心をもち、平仮名や片仮名で書かれた言葉や文を読もうとする																		
	書く	遊びや生活の中で文字や表示にふれたり思うままに表現したりしようとする						遊びや生活の中でふれる文字や表示に関心をもち、真似をして表現しようとする						線や記号、文字などを使って表現しようとする						線や記号、文字などを使うことを楽しんだり、伝えたいことを表現しようとする																		
数量	数	遊びや生活の中で様々な物の集まりにふれ、並べたり数えたりしようとする						ものやことの個数やお金に興味を示し、遊びや生活の中で数えたり、数詞や数字で表現したりする												数える経験を積むことで、数の合成、分解に興味をもち、数字や自分なりの記号で表そうとする																		
	量	遊びや生活の中で様々な量にふれ、ものと対応させながら量を比べ、量を感覚的にとらえる						遊びや生活の中で、いろいろな比べ方を試し、量の多少等を感じ取ろうとする												いろいろな比べ方で量の多少等を感じ取ろうとし、それらを言葉で表現して、遊びや生活の中で活かそうとする																		
	時間	教師の言葉かけによって、活動の流れを感じながら遊んだり生活したりしようとする						園生活のリズムを意識して遊んだり生活したりしようとし、時間を感覚的にとらえる						時計を意識して、見通しをもって遊んだり生活したりしようとし、時刻や時間を言葉で表現しようとする																								
	かたち	身の回りにある多様なかたちに親しむ						身の回りにある多様なかたちに親しみ、遊びに取り入れようとし、かたちの特徴を感覚的にとらえる						身の回りにある多様なかたちに気付き、かたちの違いを意識して遊ぶ						多様なかたちの特徴が分かり、その特徴を活かしながら遊ぶ																		
科学	気付く・見付ける	多様な自然に興味をもち、触れ合おうとする						感動や気付きを教師や友達と共有しながら、多様な自然と触れ合おうとする												諸感覚を使って自然を体験したり、関心をもって自然物や自然現象を観察しようとする																		
	試す	心地よいと感じたことを教師の援助を得ながら繰り返し楽しむ						不思議に感じたことや面白いと思ったことを繰り返し試してみようとする												「こうしたらどうなるかな」といった見通しをもち、身近な材料や用具などの特性や仕組みを工夫して遊ぼうとする																		

※1年生においては、「遊び」を「活動」と読み替えます。

リテラシーの基盤形成にかかわる 発達の様 接続期（5歳クラス9月～小学校1年生5月上旬）

視点	発達の様	○は本園における幼児の具体的な姿。これまでの研究の成果、遊びの履歴に基づいている。
言語	話す・聞く	○遊びや生活の中で、自分の思いが相手に通じるように、例えを使ったり言い換えたりして何とか自分の言葉で伝えようとする。 ○遊びや生活の中で、みんなに向かって話す教師や友達の話を自分のこととして聞こうとする。 ○1日を振り返り、楽しかったことやできるようになったことについて人前でも話そうとする。 ○人前で、伝えたいことを実物などを用いて、はっきりと分かりやすく自分の言葉で話そうとする。 ○詳しく知りたいことを友達や教師に尋ねる。(製作方法や遊びのコツ(縄跳び、コマ)など)
	伝え合う	○チーム分けやルール、作戦などについて話し合おうとする。(対戦型の遊び、鬼ごっこ、ボール遊びなど) ○遊びのイメージを共有するために、言葉をやりとりしたり話し合おうとしたりする。(お店屋さんごっこ、ショーごっこなど) ○おやつ分け方や番番の仕事など、生活に必要な事柄について話し合おうとする。 ○行事に向けて、クラスみんなで話し合おうとする。(お楽しみ発表会、お別れ会など) ○トラブルを話し合いで解決しようとする。
	読む	○平仮名や片仮名の文字や文に関心をもち読もうとする。 ○声の大きさや読むスピードに気を付けて、かたの読み札を読んだり、文字を見て、読み札に合った絵札を取ろうとしたりする。 ○絵本や紙芝居に親しみ、自分で読もうとする。
	書く	○遊びの中で必要なメッセージを、線や記号、文字などを使って表現しようとする。(矢印、貼紙「こわさないでね」など) ○お店の看板やチケット、くじなど遊びに必要な道具を線や記号、文字などを使ってつくろうとする。 ○自分の気持ちを伝えるために、手紙を書こうとしたりカードをつくったりしようとする。
数量	数	○友達と得点や回数を競い合って楽しむ。(ボール遊び、縄跳び、ビー玉コース、コリントゲーム遊びなど) ○得点板などを使って点数をつけたり得点差を考えたりしようとする。(対戦型の遊び、ボーリング、輪投げなど) ○人数や個人の技能差を考えながら、チーム分けをしようとする。(対戦型の遊び、鬼ごっこ、ボール遊びなど) ○人数分のチケットや椅子を用意しようとする。(お話劇場、ショーごっこなど) ○品物の数や値段を工夫しながらお店屋さんごっこを楽しむ。 ○収穫した野菜や木の実の数をかぞえたり分けたりしようとする。 ○おやつのかぞえたりみんなが同じ数になるように分けたりしようとする。
	量	○長さや高さ、穴の大きさや深さなどを考えて、水路やコースなどをつくろうとする。(雨どい遊び、ビー玉コースづくりなど) ○収穫した野菜の大きさ(長さや重さ)を比べようとする。(サツマイモ、ジャガイモ、大根の収穫など) ○みんなが同じ量になるようにおやつなどを分けようとする。(ジュース、豆まきの大豆など) ○つくりたいものの大きさや形に合わせて、適量の材料を集めようとする。(雪遊び、製作など) ○距離や回数などを競い合って楽しむ。(縄跳び、一輪車など) ○広さや高さなどを身体的感覚でとらえようとする。(樹木の高さ、穴の深さ、かまぐらひの広さなど)
	時間	○アナログ時計の文字盤や針の動きから時刻や時間の経過を感じる。 ○時間を競い合って楽しむ。(こま回し、フラフープなど) ○誕生日表やカレンダーを見て、月の並びを意識する。 ○一日の予定や週予定を意識して生活しようとする。 ○春夏秋冬の出来事を振り返り、一年間の思い出を話し合おうとする。(修了式の思い出発表)
	かたち	○つくりたいものに合わせて、箱や筒などのかたちや大きさを選択したり組合せ方を工夫したりしようとする。(製作) ○つくりたいものの大きさやかたちに合わせて、力を合わせようとする。(雪遊びなど) ○整ったかたちになるように見通しをもって積木を片付けようとする。 ○つくりたいものの形を意識して見通しをもって折り紙や色画用紙を折ったり切ったりして作品をつくる。
科学	気付く・見付ける	○砂や泥の性質を活かして遊ぶ。 ○水の性質(温度による違い)やはたらき(浸食、運搬、堆積)などに気付き、それらを活かして遊ぶ。 ○動物(昆虫等を含む)に触れたり捕まったり飼ったりしようとする。 ○花、葉、実の種類によって、色、形、大きさ、香り、味などが異なることに気付いたり遊びに使ったりする。 ○植物の生長に気付いたり収穫の喜びを仲間と分かち合ったりする。 ○野原や森の散策をして、自然の美しさや不思議さに気付いたり季節感を感じたりする。 ○風、雨、雪、氷、霜などの自然現象を体感して遊ぶ。 ○季節によって変化するものに気付く。
	試す	○つくりたいものに合わせて、材料を選択し、組み合わせ方を工夫する。 ○素材や材料の特徴を活かして、遊び道具や衣装をつくろうとする。(柔らかい紙でエプロンをつくる、坂を転がる車をつくるなど) ○材料のつなぎ方や高低差などを考えながら、水や砂、ビー玉などを流したり転がしたりしようとする。 ○ボールに与える力の強さを調節して遊ぶ。(サッカー、ドッジボールなど) ○タイミングよく跳んだり回す速さを工夫したりする。(縄跳び、フラフープなど) ○回り方や色の変化などを楽しみながら、こまの回り方や遊び方を工夫する。

リテラシーの基盤をはぐくむ教師の援助

- 幼児が自ら感動を伝えたいような豊かな実体験を仕組み、その子らしい表現を共感的に聞くようにする。
- 進んで話したり友達の話をよく聞いたりする仲間関係が育つように、幼児の話を共感的に聞くなど教師自身が聞き方の手本となるようにする。
- 経験に基づく話し合いができるように、経験を想起できる言葉かけをしたり幼児の言葉を補ったりする。
- 自分たちで遊びをつくり上げた楽しさや喜びを味わえるように、お互いの感想を伝え合う場を設定する。
- 目的をもって話し合おうとしている場面では、幼児の話を整理したり思いを仲介したりし、互いに納得できる話し合いになるように援助する。
- 大勢の前で自信をもって話したり表現したりできるように、取り組んだことや気持ちを振り返る場を設定する。
- 絵本や紙芝居に触れる機会を増やし、語彙や表現方法の獲得を促す。

- 遊びや生活の中で、幼児の関心や気付きの様子に応じて、数への感覚が培われるように、数字と数詞への気付きを促す言葉かけをする。
- 様々な「数える」機会を通して、「一対一対応でものを数える」という行為を徐々に獲得できるように、個に応じた言葉かけをしていく。
- 量感を豊かにするために、身体的感覚で高さや広さをとらえるなど様々な「比べる」経験を大切にします。
- かたちの特徴を感覚的にとらえられるように、大きさや素材が異なる積木やブロックを種類別に配置する。

- 幼児のつぶやきに耳を傾けながら感動を共有し、様々ななかかわり方を通して、自然への関心や生命を大切にすることが培われるようにする。
- 繰り返し対象にかかわれる時間や空間を十分確保したり、思考が生まれやすい道具(すり鉢、雨どいなど)を工夫したりして、疑問や気付きが生まれるようにする。
- 幼児のものの性質に関する気付きを言語化したり、幼児が試そうとしていることを見越して、適切な道具を用意し手助けしたりして探究心を高める。

神戸大学附属幼稚園 平成24年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

幼稚園教育と小学校教育の接続期における円滑な接続のための新分野創設にむけたカリキュラムと指導方法等の研究開発

2 研究の概要

本研究は、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るために、幼稚園と小学校の教育課程の連続性を明確にすることを目的とする。本研究では、幼稚園教育と小学校教育を接続するための新分野創設及び接続カリキュラムと指導方法等の開発を目指すとともに、追跡調査により、接続カリキュラムによる幼稚園と小学校の教育の一貫性において、新分野の有効性を検証する。

具体的には、以下の方法等による。

- ① 「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム（下位項目毎）」の相関関係を明確化
- ② 子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設
- ③ 幼稚園と小学校の教育課程を円滑に接続するための詳細な「接続期」の設定
- ④ 「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発
- ⑤ 研究実践による実践データの収集
- ⑥ 研究開発結果に対する検証・評価
- ⑦ 接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証

3 研究の目的と仮説

（1）研究仮説

【現状の分析と研究の目的】

平成20年3月28日に告示された「幼稚園教育要領」において、「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること。」が明記され、幼児と児童、教員同士の交流が行われている。

しかしながら、幼稚園と小学校の連携に関しては、両者の教育内容・方法等への認識の違いから相互に意義のある交流がなされているとは言えない状況にある。また、教員同士の交流によって、互いの教育内容及び指導方法の違いや共通点について相互理解を深め、一貫性を持った教育課程の編成が必要であるが、これらに資するような幼稚園と小学校の教育課程が直接接続される実践研究が十分になされているとは言い難い状況にある。

そこで、本研究においては、5歳（幼稚園年長）から6歳（小学校第1学年）を「接続期」として仮定し、幼稚園と小学校の教育課程の連続性を明確にすることにより、幼稚園教育と小学校教育とを接続するための新たな分野を設定するなど幼小接続カリキュラムの開発、編成を通じて、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を目指す。

本研究の遂行により、学校教育のはじまりとしての幼稚園教育が、小学校教育との関連で学校教育の体系に強固に位置付けられることが期待される。また本研究は、子どもの発達や学びの連続性が確保され、子ども一人一人が確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をより確かに身に付ける事へとつながるものとする。

なお、本園では、附属小学校及び附属中学校とともに平成12年度から平成14年度までの文部科学省研究開発学校指定研究を受け、幼稚園入園から中学校卒業までの子どもの学びの過程を整理し「学びの一覧表」を作成した。その研究過程において、幼小中12年間を見通した、子どもの学びを見取る共通カリキュラム（10視点カリキュラム：①自分の生き方、②人とのつながり、③健全なからだ、④感動の表現、⑤自然との共生、⑥文字とことば、⑦ものと現象、⑧数とたち、⑨豊かなくらし、⑩世の中のしくみ）を作成し、その実践を深めてきている。これらの実践研究の成果の継続性を確保し活用することは、幼稚園教育と小学校教育の接続に焦点をあてた研究を更に深化・発展させ、また、そこで得られる数々の成果を実証するために必要不可欠であるとする。

なぜなら、現在の本園のカリキュラムは、幼稚園教育要領の5領域よりもさらに詳細な「10視点」を基に編成しており、この「10視点」を用いて幼稚園教育と小学校教育のつながりや構造を分析することで、幼小それぞれの教育内容の接続に関する課題が明らかにできると考えるからである。これまでの研究実績を踏まえて、「10視点カリキュラム」の「10視点」及び「下位項目」を基本とした上で、本研究において、子どもの実態や発達の過程と再度照らし合わせることで見直しを図り「新分野」として設定する。「10視点カリキュラム」の「下位項目」は40を数えており、これを基に設定する「新分野」は、幼児期の子どもにねらうべき教育内容を幼稚園教育要領の5領域よりも詳細に示すものとなる。

また、幼稚園教育と小学校教育の「接続期」を子どもの実態から設定し、「接続期」に特有に見られる“ねらい”や“指導方法”の特徴を「10視点カリキュラム」を用いて整理照合することで、接続期のカリキュラム（以下「接続カリキュラム」と呼ぶ）を開発できると考えている。接続カリキュラムは、接続期の子どもにふさわしい教育の内容と方法を示すものであり、幼稚園教育の3～5歳の学び方から、小学校教育の6歳以降の学び方へと、子

どもにとって自然な形で学び方が移行することを可能にするカリキュラムであると考え。そのためには、幼稚園の年長から小学校低学年にかけての「接続期」の節目をより明確にしていく必要がある。本研究においては、5歳（幼稚園年長）から6歳（小学校第1学年）を「接続期」として仮定するが、接続カリキュラムの開発を通して、より詳細な「接続期」を明らかにしたいと考える。

以上、本研究において幼稚園と小学校の教育課程の連続性を明確にし、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続についての研究開発を行うことにより、幼稚園教育要領の改訂及び、幼稚園教育並びに小学校教育の深化・発展に資することができると思われる。

【研究の過程】

具体的な研究の過程は以下のように考えている。

① 「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム（下位項目毎）」の相関関係を明確化

幼稚園教育と小学校教育との連携、接続に関する先行研究の収集・分析を踏まえて、「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム（下位項目毎）」の三者について、ねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を整理し、それぞれの相関関係を明らかにした上で、接続に焦点を当てた分析研究を行う。

② 子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設

保育実践の中で子どもの事実を基に見とった子どもの学びから“ねらい”を評価し、修正し直した月別の指導計画から、遊びや生活の場面別、「10視点」別に取り出した“ねらい”を、3歳（年少）から5歳（年長）までの3年間を並べ、つながりの中で検討することで「新分野」を創設する。

③ 幼稚園と小学校の教育課程を円滑に接続するための詳細な「接続期」の設定

「接続期」に特有に見られる遊びや生活の場面を抽出した上で、それらの“ねらい”や“指導方法”の特徴を「10視点カリキュラム」を基に創設した「新分野」を用いて整理するとともに、小学校との連携を図り、詳細な「接続期」を明らかにする。

④ 「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発

②及び③における研究結果を踏まえ、「接続期」の子どもの発達に応じた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材を工夫した実践を構想する。

⑤ 研究実践による実践データの収集

④で開発した指導方法及び教材を用いた研究実践を行い、その研究実践から「接続カリキュラム」の検証に向けた実践データを集積する。

⑥ 研究開発結果に対する検証・評価

⑤で収集した実践データ及び①で得られた分析結果を基に、「新分野」の有効性及び「接続カリキュラム」の指導方法及び教材について検証・評価を行う。その結果に応じて、「接続カリキュラム」の再設定等に取り組む。

⑦ 接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証

附属小学校との連携により「接続期」の実践データを継続して収集し、「接続カリキュラム」を実施した本園を修了した子どもと外部から入学した子どもとのデータを比較することにより、「新分野」及び「接続カリキュラム」の有効性を検証する。

【予想される研究成果】

本研究開発による実践を通して、次のような成果が得られると考える。

- ① 幼小連携・接続に関する教員の意識を高め、理解を深めるための基本的な資料の提供とともに、「小学校学習指導要領」と「幼稚園教育要領」における教育課程上の接続を明確にする実践成果を得ることができる。
- ② 「接続カリキュラム」を通して、幼稚園における教育の成果を小学校に円滑につなげていくことにより、主体的に学ぼうとする態度の育成及びいわゆる小1プロブレムの解決に資することができる。
- ③ 「新分野」及び「接続カリキュラム」を創設、構想、実践することを通して、幼小接続期の子どもの学びを支える教諭像を見出すことができる。
- ④ 子どもの追跡調査によって、「接続カリキュラム」による教育の一貫性について、「新分野」の有効性を

証明できる。

- ⑤ 研究発表会等を通して、幼稚園教育と小学校教育のつながりや「接続期」における指導の在り方について、地域の幼児教育関係者及び小学校教員等との相互理解を深めるとともに、保護者の理解を深め、より一層の連携・協力を推進することができる。

(2) 教育課程の特例

なし

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

本研究では、詳細な観点をもつ教育課程を編成した。これは、「10 視点」、40 項目の「下位項目」の妥当性を検討しつつ、実践で確かめた指導計画を基にして「下位項目」毎に子どもの実態や発達の過程に基づいたねらいを編成した教育課程である。開発した「10 視点」及びその定義は次に示す通りである。

視点名	視点の定義
自分の生き方	様々なかかわり合いの中で、自分を見つめ、したいことやすべきことを自分で決め、よりよい生き方を目指すとする
人とのつながり	人とかかわることを通して、他者の思いや考えに気付き、よりよい関係をつくろうとする
健全なからだ	自他のからだの成長や変化に気付き、めあてをもって健康なからだづくりに取り組む
自然との共生	豊かな自然体験を通して、その美しさや不思議さに触れる中で、自然や生き物に興味・関心をもち、望ましい自然観・生命観を養う
ものと現象	ものがもつ性質やものとの関係のなかで起こる現象に対して、原因を考えたり確かめようとしたりする
感動の表現	多様な表現や文化のよさを感じ、イメージをふくらませ、自分らしく表現しながら豊かな感性を養う
文字とことば	音声言語や文字言語に触れ、語彙を増やし、思いや考えを伝え合う
数とかたち	量やかたち、空間を感覚的にとらえたり、身の回りの事象を数理的に判断したりする
豊かなくらし	喜んで食べたり、伝統行事に触れたり、道具や素材を使ったりして、自分たちのくらし(遊びや生活)をよりよくするための方法について考えたりしてみたりする
世の中のしくみ	自分たちのくらし(遊びや生活)を支えるものについて知ったり、きまりごとの意味やものを大切に使う使い方を考えたりする

「10 視点」は右に示す概念図のとおり、構造化を図った。「自分の生き方」及び「人とのつながり」を核とし、他の8視点をその周りに位置付けた。

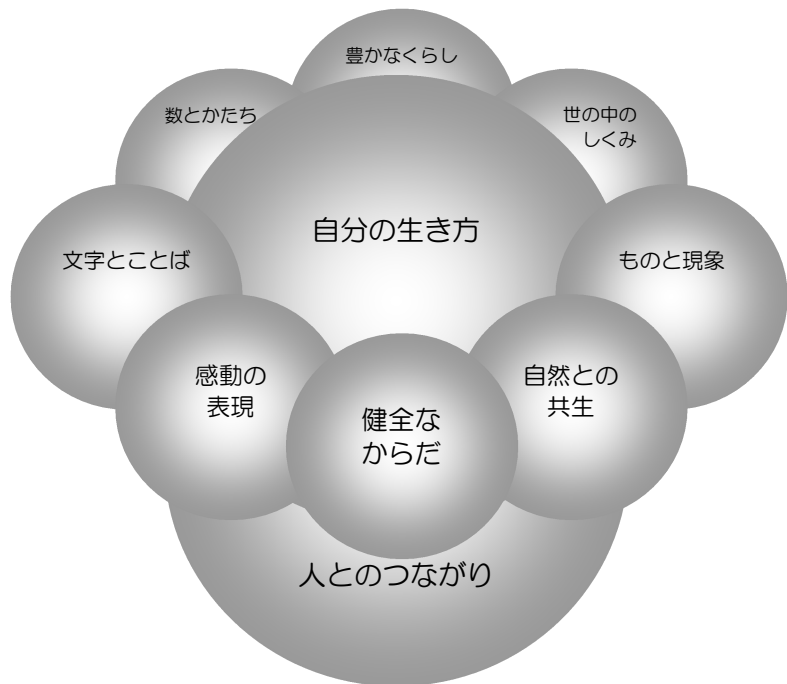
子どもは幼稚園での遊びや生活を通して様々なことを学んでいる。ある遊びや生活を取り出し、それらを分析的に見た時、私達は、「10 視点」の中のいくつかの視点に関する学びを見て取ることができる。

中でも「自分の生き方」及び「人とのつながり」は、いずれの遊びや生活を取り上げても、必ず子どもの学びを見て取ることができる視点である。即ち遊びや生活の場面に左右されないことのない視点であり、他の視点とは一線を画する視点であると考えている。

ただし、その他の8視点も遊びや生活によって学びの見取りやすさに差異が見られるものの、子どもの学びを捉える時には重要な視点であることには変わりはない。

そこで、「自分の生き方」及び「人とのつながり」を核とし、それらが他の8視点とも相互に関連していることを表現した。

「10 視点」、「40 の下位項目」毎の「入園から修了までのねらい一覧」は報告書に示す通りである。



(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p>第一年次は、45回の園内研究会、7回の拡大研究会、2回の運営指導委員会を実施、以下の研究を実施した。</p> <p>① <u>「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム（下位項目毎）」の関連関係を明確化</u> 幼稚園教育と小学校教育との連携、接続に関する先行研究の収集・分析を踏まえて、「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム」の三者について、ねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を整理し、それぞれの相関関係を分析した。その結果、「10視点カリキュラム」のより詳細な観点である「下位項目」を用いて再度分析を直すことで、より三者のねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を整理できる見通しをもつことができた。「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム」の三者について、ねらい・目標及び内容におけるつながりや構造の整理実現のために、本園の教育課程を「10視点カリキュラム」の「下位項目」毎に編成することに着手した。</p> <p>② <u>子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設</u> 「10視点カリキュラム」と「幼稚園教育要領」の各領域のつながりや構造を示す際には、「10視点カリキュラム」の「10視点」の「下位項目」毎のねらいが必要であることが明らかになった。このことに伴い、本園の教育課程のねらいを「10視点カリキュラム」の「下位項目」毎に編成することに着手した。「10視点」の「下位項目」は合計すると全部で42存在するが、その全ての検討を終え、最終40となった一つ一つの「下位項目」において、3歳から5歳までの発達に基づくねらいを編成し、分野創設の準備を進めた。</p> <p>③ <u>幼稚園と小学校の教育課程を円滑に接続するための詳細な「接続期」の設定</u> 本研究においては、5歳（幼稚園年長）から6歳（小学校第1学年）を「接続期」として仮定し、「接続期」特有に見られる発達の諸側面を明らかにするとともに、実践を通して、子どもの発達に即した「接続期」をも明らかにしようと考えた。 一年次は、仮定した「接続期」の妥当性について確かめた。そこで得られた課題については、幼稚園の教師だけの捉えに偏ることがないように、附属小学校と合同で実施した「5・6歳の合同単元学習」を通して、幼・小の教師がともに子どもの学びを捉えることにより、発達の節目の位置を確かめた。 今後、各年齢と各時期の実践を分析することで、子どもの発達に即したさらに詳細な「接続期」を明らかにするために、一年次は、それぞれの時期の保育実践の整理・構造化に着手した。</p> <p>④ <u>「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発</u> 「一人一人の子どもが、自分の或いは友達と共通の目的に向かって自分の力を発揮し、挑戦を繰り返したり友達と創り上げたりする遊びや生活のまとまり」に注目し、遊びや生活の場面からそれらを抽出し、単元計画として試行的実践を通して、整理・構造化を行った。</p>
第2年次	<p>第二年次は、40回の園内研究会、8回の拡大研究会、2回の運営指導委員会を実施、以下の研究を実施した。</p> <p>① <u>「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム（下位項目毎）」の関連関係を明確化</u> 「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム」の三者について、ねらい・目標及び内容におけるつながりや構造の整理のために、「10視点カリキュラム」のより詳細な観点である40項目に及ぶ「下位項目」毎の教育課程を編成した。そして、「10視点カリキュラム」のより詳細な観点である「下位項目」を用いて、「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」とのねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を再度分析・整理し直した。</p> <p>② <u>子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設</u> 教育課程のねらいを「10視点カリキュラム」の「下位項目」毎に編成した。「10視点」の「下位項目」は全部で40項目となり、その40項目すべてについて検討を終え、一つ一つにおいて、3歳から5歳までの発達に基づくねらいを編成した。さらに、前述したように、「10視点カリキュラム」の「下位項目」を用いて「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」とのねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を分析・整理し直した。その結果、「新分野」とは、「10視点カリキュラム」に見る「10視点」であり、「40の下位項目」に相当すると構想するに至った。</p> <p>③ <u>幼稚園と小学校の教育課程を円滑に接続するための詳細な「接続期」の設定</u> 二年次は、各年齢と各時期の実践を分析することで、子どもの発達に即したさらに詳細な「接続期」を明らかにするため、それぞれの時期の保育実践の整理・構造化を進めた。</p> <p>④ <u>「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発</u> 二年次は一年次に整理・構造化を行った「遊びや生活のまとまり」を新たに編成した「40の下位項目」をもつ「10視点カリキュラム」によって整理し直すとともに、新しく見出した「遊びや活動のまとまり」についても整理・構造化を行い、それらの分析に着手した。</p> <p>⑤ <u>研究実践による実践データの収集</u> 一年次に整理・構造化を行った「遊びや生活のまとまり」と、新しく見出した「遊びや活動のまとまり」を取り上げ、新たに編成した「40の下位項目」をもつ「10視点カリキュラム」によって整理・構造化を</p>

	<p>行い、実践データを集積した。そして、それらを生かして、「接続カリキュラム」に見直しをかけた。</p> <p>⑥ <u>研究開発結果に対する検証・評価</u> 三年次の実施に向けて、データを集積した。</p> <p>⑦ <u>接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証</u> 本園を修了して進学した子どもと外部から入学した子どもを比較するための質問紙調査を「10 視点カリキュラム」の5歳修了時点のねらいを基にして作成した。附属小学校との連携により、保護者及び1年生担任に質問紙調査を実施した。また、1年生担任に対しては、入学から夏休みまでの4ヶ月間の子どもの姿と、必要に応じて行った一人一人への配慮について聞き取り調査を実施した。</p>
第3年次	<p>第三年次は、33回（3月1日現在）の園内研究会、7回の拡大研究会、2回の運営指導委員会を実施、以下の研究を実施した。</p> <p>① <u>「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10 視点カリキュラム（下位項目毎）」の相関関係を明確化</u> 二年次に編成した教育課程に見直しをかけ、実践を通して一部を修正するとともに、修正箇所については改めて、「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」とのねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を分析・整理し直した。</p> <p>② <u>子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設</u> 二年次の構想を受け、『神戸大学附属幼稚園プラン』の創造を進める過程において、「新分野」とは、「10 視点カリキュラム」の「10 視点」及び、「40 の下位項目」であると結論付け、本園が考える幼児教育の中身を説明する新たな枠組みとして位置づけた。</p> <p>③ <u>幼稚園と小学校の教育課程を円滑に接続するための詳細な「接続期」の設定</u> 三年次は、詳細な「接続期」を設定するために、小学校教育への接続の観点から抽出した保育実践を分析し、接続期の教育として特徴的であり、特に重点をかける下位項目を見出した。それらの下位項目の5歳修了時のねらいが始まる時期を手がかりに、幼稚園における接続期は9月から11月頃にかけて緩やかに始まると設定した。</p> <p>④ <u>「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発</u> 二年次までの試行的実践を整理・構造化した単元を分析することで、幼稚園教育と小学校教育を接続する観点から子どもに育つことを期待する力を育む指導方法及び教材に欠かせない要素のいくつかを見出した。5歳児の1学期には、単元の分析により見出した知見を生かすべく、いくつかの子どもたちの活動において開発した指導方法及び教材を試行的に実践し、その効果を確認した。2学期以降は、開発した指導方法及び教材の効果の検証・評価を行うとともに、引き続き「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発に努めた。</p> <p>⑤ <u>研究実践による実践データの収集</u> 二年次に見直した「接続カリキュラム」の実践により開発した指導方法及び教材を用いて、その効果の検証・評価を行った。</p> <p>⑥ <u>研究開発結果に対する検証・評価</u> 三年次の実施に向けて、データを集積した。</p> <p>⑦ <u>接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証</u> 二年次に引き続き、本園を修了して進学した子どもと外部から入学した子どもを比較するための質問紙調査を「10 視点カリキュラム」の5歳修了時のねらいを基にして作成した。附属小学校との連携により、保護者及び1年生担任に質問紙調査を実施した。また、1年生担任に対しては、入学から6月までの2ヶ月間の子どもの姿と、必要に応じて行った一人一人への配慮について聞き取り調査を実施した。 さらに、小学校の成績の評価項目に関して、本園を修了して進学した子どもと外部から入学した子どもを比較する追跡調査を実施し、検証を行った。</p>

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<p>運営指導委員会にて以下の事項について評価を受けた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「教育要領」、「指導要領」及び「10 視点カリキュラム」の相関関係の明確化 ・ 幼稚園と小学校の教育課程を接続するための「接続期」の設定 ・ 教育課程の連続性を明確にするための新たな分野の創設 ・ 新たな分野を踏まえた指導方法及び教材の研究開発
第2年次	<p>運営指導委員会にて以下の事項について評価を受けた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「教育要領」、「指導要領」及び「10 視点カリキュラム（下位項目毎）」の相関関係の明確化 ・ 子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設 ・ 幼稚園と小学校の教育課程を接続するための「接続期」の設定 ・ 「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発 ・ 研究実践による実践データの収集 ・ 接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証

	<p>国内外の保育研究者に本園教育課程を紹介し、評価を受けた</p> <p>1年生保護者(5月)、幼稚園年長時担任(6～7月)、小学校1年生担任(8月)による子どもの追跡調査を実施した</p> <p>小学校1年生担任による入学時から夏休みにかけての子どもの様子や担任の一人一人への配慮等に関する聞き取り調査(7月)を実施した</p>
第3年次	<p>運営指導委員会及び研究発表会にて以下の事項について評価を受けた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「教育要領」、「指導要領」及び「10視点カリキュラム(下位項目毎)」の相関関係の明確化 ・ 子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設 ・ 幼稚園と小学校の教育課程を接続するための「接続期」の設定 ・ 「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発 ・ 研究実践による実践データの収集 ・ 接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 子どもへの効果

子どもへの効果については、客観的な数値で表せるよう、「10視点カリキュラム」に基づく本園教育課程の、5歳修了時のねらいを基に47の評価項目を作成し、研究開発第一年次と第二年次の年長児を対象に、保護者及び小学校1年生担任の協力を得て、子どもの追跡調査を行った。

保護者による評価については、研究開発第一年次の年長児が小学校入学後(平成23年4月28日)に調査を行い、内部進学者と外部進学者との比較を行った。その結果、両者との間に有意な差が見られるとは言えなかった。第二年次については、小学校入学前(平成24年2月29日)に、平成24年度神戸大学附属小学校新1年生になる保護者全員にアンケートを配布し、協力を求めた。第一年次よりも調査時期を早めたのは、幼稚園修了時期の子どもの姿について、保護者の記憶がより鮮明な間に調査をすることが、より正確な評価につながると考えたからである。調査の結果、一年次と同じく、両者との間に有意な差が見られるとは言えなかった。要因としては、保護者が我が子について評価を行ったことで評価者の評価基準にばらつきがあったことが考えられる。

小学校1年生担任による評価については、入学時から夏休みにかけての子どもの様子や担任の一人一人への配慮等に関する聞き取り調査や、保護者と同様の評価項目による質問紙調査、1年生の成績を総合して、子どもへの効果を確かめようとデータを集めた。

小学校の成績による評価については、小学校の評価項目に基づいて、平成23年度小学校1年生の成績を得点化した。その結果を、内部進学者と外部進学者とに分け、その平均値と標準偏差(S.D.)を算出し、さらに項目毎に対応のないt検定を実施した。その結果、両者との間に有意な差が見られるとは言えなかった。

入学時から夏休みにかけての子どもの様子や担任の一人一人への配慮等に関する聞き取り調査からは、1年生に進学した当初の子どもの姿や、一人一人の課題を小学校の教師がどういった観点から捉え、捉えた課題にどのように対応しているのかといった情報を得ることができた。しかし、これらから、子どもへの効果を見出すには至っていない。

保護者と同様の評価項目による小学校1年生担任への質問紙調査では、保護者が評価したものと同様の47項目に基づいて、平成23年度及び平成24年度の小学校1年生担任にも児童一人一人を評定するように求めた。その結果を、内部進学者と外部進学者とに分け、その平均値と標準偏差(S.D.)を算出し、さらに項目ごとに対応のないt検定を実施した。その結果を年度別に以下に示す。

<平成23年度>

有意差が見られた項目($p < 0.05$)を取り上げると、「自分のすべきことをしたり、した方がよいと思うことを自分からすすんでしたりする」という項目において、外部進学者よりも内部進学者の方に、より子どもの育っている姿が確認された。ここから、内部進学者の「自立性、主体性(したいことやすべきことを自分で決め、自ら行動を起こしている姿)」が高いことが明らかにされた。

また、差のある傾向が見られた項目($p < 0.10$)に着目すると、内部進学者の平均値が高い項目と外部進学者の平均値が高い項目が得られた。「家族や友達のことを考えて、人のためになることをする」「家族や友達を手伝ったり助けたり一緒にしたりする」「新しい環境の中でも(なんとか)落ち着いている」という項目では、外部進学者よりも内部進学者の方に、より子どもの育っている姿が確認された。ここから、内部進学者の「他者への共感性、向社会的行動、自律性(他者の思いや考えに気付き、よりよい関係を作ろうとしている姿など)」が高いことがうかがえる。これに対し、「歌詞の意味や状況に合わせて楽しく歌ったりしっとり歌ったりする」「目にした現象を話したり、その原因と結果を結びつけて考えて話したりする」という項目では、内部進学者よりも外部進学者の方に、より子どもの育っている姿が確認された。ここから、外部進学者の「音楽表現への意欲、現象と因果関係への関心・理解」が高いことがうかがえる。

以上から、自己と他者との関係性を中心とした領域の発達においては内部進学者が優れており、表現や環境(現象)への積極性に関する領域の発達においては外部進学者が優れていると言えるが、このような差異が生まれた要因については、慎重に検討する必要があると考える。

<平成 24 年度>

有意差が見られた項目 ($p < 0.05$) を取り上げると、「人の気持ちを聞いたり周りの状況を見たりして、自分勝手なことを言わない・しない」、「新しい環境の中でも (なんとか) 落ち着いている」という項目において、外部進学者よりも内部進学者の方に、より子どもの育っている姿が確認された。ここから、内部進学者の「協調性、自律性 (人の気持ちを聞いたり周りの状況を見たりして自ら判断し、自分の行為を主体的に規制している姿)、向社会的行動」が高いことが明らかにされた。これに対し、「場に応じた言葉を使う」という項目において、内部進学者よりも外部進学者の方に、より子どもの育っている姿が確認された。ここから、外部進学者の「状況に応じた言葉の使い分けに関する理解」が高いことが明らかにされた。

また、差のある傾向が見られた項目 ($p < 0.10$) に着目すると、「家族や友達のことや言ったことを喜んで話したり、怒って訴えたりする」という項目では、内部進学者よりも外部進学者の方に、より多く見られることが確認された。ここから、外部進学者の「他者に対する興味・関心」が高いことがうかがえる。しかしながら、この項目については、外部進学者の「友達とトラブルが起こったときに、子ども同士で解決しにくい姿」が確認されたとも言える。ここから、内部進学者の「自主性 (他者との問題を自分で解決しようとしている姿)、自立性」が高いことがうかがえる。

以上から、自己と他者との関係性を中心とした領域の発達においては内部進学者が優れており、「状況に応じた言葉の使い分けに関する理解」においては、外部進学者が優れていると言えるが、このような差異が生まれた要因については、慎重に検討する必要があると考える。

平成 23 年度と 24 年度の結果を合わせて見ると、どちらの年度においても共通して、自己と他者との関係性を中心とした領域の発達においては内部進学者が優れていることが明らかになった。このことから、視点「自分の生き方」、「人とのつながり」を基軸にしたカリキュラムの有効性が、小学校 1 年生の子どもの姿を小学校の担任が行った評価結果によって検証されたと言える。

② 教師への効果

新しい教育課程は、「10 視点」及び「40 の下位項目」があり、詳細な観点毎に子どもが育っていく道筋を思い浮かべることができる。我々が保育を計画する際に欠かせないものであり、実践を通して子どもの事実を基に改善を繰り返すことができるものである。実際に、本研究の間にも、子どもの事実を基に発達の節目を新たに設定したり、発達の節目の位置を変更したりするなどの改善をしてきている。

教育課程の改善を可能にしているのが、新しい指導計画であり、新しい指導計画は、遊びや生活の場面毎に、「10 視点」及び「40 の下位項目」毎にねらいを計画している。このことにより、遊びや生活の場面毎に、より一層ねらいの方向を明確に意識して保育するようになった。同時に、子どもの学びを詳細な観点で捉えられるようになってきている。さらに、「視点」及び「下位項目」と「遊びや生活の場面」の関係を一目で見られるように表していることにより、「それぞれの視点及び下位項目のねらいをどのような遊びや生活の場面において計画しているのか」や「ある遊びや生活の場面において、どの視点及び下位項目のねらいを計画しているのか」という見方が容易にできるとともに、遊びによるねらいの偏りや傾向が分かり、意識して計画・実践するようになった。

また、全員の教師が単元計画を作成し、実践してきた。この取組を通して、単元として取り出した遊びや生活をいくつかの大きさの活動レベルで捉え、それらの活動の流れを予想して整理しておくことで、単元全体を見渡した上での今を教師は単元展開中、常に自覚する経験をしてきた。

このような考え方は、経験豊かな優れた保育実践者であれば、感覚的に行っているであろうと考える。我々は、そのような保育者実践者に一刻も早く近づきたいと考えている。同時に、本園教育課程と指導計画である「神戸大学附属幼稚園プラン」を創造し、活用し、改善することを通して、「神戸大学附属幼稚園プラン」は、教師が成長するための道具として有効に働いていることを実感している。経験豊かな優れた保育実践者が感覚的に行っていることを、我々は、「神戸大学附属幼稚園プラン」を創造し、活用し、改善することで自覚的に行おうとしている。

なお、詳細については、本園の 4 人の教師 (教師経験が、4 年、6 年、9 年、12 年) が具体的な事例を挙げて報告書の本文に示す。

③ 保護者等への効果

研究課題及び研究内容について、保護者の理解と保護者からの協力が得られるように、第二年度の 5 月に研究説明会を実施した。また、第三年度の 1 月には、3 年間の研究報告会を実施した。研究説明会と研究報告会の直後にアンケート調査を実施した。質問項目は、「附属幼稚園の研究は意義がある」「附属幼稚園のカリキュラムは小学校教育との接続が工夫されており特色がある」「附属幼稚園のカリキュラムは理解しやすい」「附属幼稚園のカリキュラムに満足している」「附属幼稚園は研究やカリキュラムについて分かりやすく伝えている」「附属幼稚園の研究に必要な協力をしたい」の 6 つであった。選択肢は、「そう思う」「ややそう思う」「あまり (そう) 思わない」「まったく (そう) 思わない」の 4 つであった。第二年度における回答分布が第三年度になってどう変化したかを項目ごとに確認し、その傾向を全体的に考察・整理する。

まず、「附属幼稚園の研究は意義がある」と「附属幼稚園の研究に必要な協力をしたい」の 2 項目に関しては、第二年度当初より肯定的な回答をする保護者が多く (いずれも 90%以上が肯定)、その天井効果により、第三年度において顕著な変化が見られず、また、否定的な方向に回答が変化しているわけでもない。したがって、ほとんどの保護者は、カリキュラム研究の開始時も終了時も、附属園での研究に意義があると捉えており、その推進に対してできる限りの協力を惜しまないという構えを持っていると判断できる。

次に、「附属幼稚園のカリキュラムは小学校教育との接続が工夫されており特色がある」に関しては、「そう思

う」が17ポイント程度上昇し、「ややそう思う」が10ポイント程度下降している。ここから、詳細な観点のカリキュラムが新しく編成されたことによって、カリキュラムにおける幼少接続の工夫への理解が深まった保護者が一定数いることが看取できる。しかし、第三年次終了時点でも、「ややそう思う」の割合が全体の3分の1程度となっており、接続の工夫や特色が十分に保護者に伝わったとは言えない。

「附属幼稚園のカリキュラムは理解しやすい」に関しては、「そう思う」が8ポイント程度上昇し、「ややそう思う」が3ポイント程度下降している。ここから、詳細な観点のカリキュラムが新しく編成されたことによって、カリキュラムについての理解を深めることのできた保護者が少数ながらいることが看取できる。しかし、第三年次終了時点でも、「ややそう思う」の割合が全体の約40%、「あまり思わない」の割合が全体の約5%となっており、附属園のカリキュラムは6割程度の保護者にとっては理解しやすいものの、すべての保護者にとって理解しやすいものではなかったと言える。

「附属幼稚園は研究やカリキュラムについて分かりやすく伝えている」については、「そう思う」の比率がほとんど変化せず、「ややそう思う」の比率が4ポイント程度増加している。また、「あまり思わない」は3ポイントほど減ったものの、4.5%の保護者は否定的に評価している。ここから、全体の6割程度の保護者には附属園の研究内容やカリキュラム内容は十分伝わっているものの、必ずしもすべての保護者に十分に伝わっていなかったと言えよう。

最後に、「附属幼稚園のカリキュラムに満足している」については、カリキュラムの工夫や特色の認知、カリキュラムの分かりやすさ、カリキュラムの理解しやすさの結果を反映して、「そう思う」の比率が約61%から約64%へ、「ややそう思う」の比率が33%から約34%へと、ほとんど変化していない。つまり、保護者のおおむね3分の2は十分に満足しているものの、約3分の1の保護者は、附属園のカリキュラムについて必ずしも十分に満足していないことが読み取れる。

項目毎の詳細な変化については、報告書の本文に示す。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

本研究開発においては、5歳（幼稚園年長）から6歳（小学校第1学年）を「接続期」と仮定し、「接続期」特有に見られる発達の諸側面を明らかにするとともに、実践を通して、子どもの発達に即した「接続期」をも明らかにしようと考えた。「接続期」の発達の諸側面と詳細な「接続期」の始まりの時期については、幼稚園の子どもの事実を基にした教育課程を用いて特定することができた。しかしながら、小学校における「接続期」の終わりの時期については、特定するには至っていない。子どもの評価等で、附属小学校から協力を得ているものの、本研究開発は、幼稚園が単独で受けているため、詳細な「接続期」の終わりの時期を特定することは非常に困難であったためである。子どもの事実を基に接続期の終わりを設定するためには、幼稚園と小学校が共に研究開発学校の指定を受けた上で、研究開発を行う必要があると考えている。そうすることで、幼稚園のみに留まらず、小学校における接続カリキュラムを示すことができると考える。さらには幼小9年間を一体として捉えたカリキュラムを示すことを目指していきたい。

また、研究開発においては、子どもへの効果についても客観的な数値で示すことが求められている。前述したように、様々な評価方法を考え試行錯誤してきた。期待している結果が得られなかった評価方法についても、運営指導委員や研究協力者の先生方からは、「評価方法を開発する意味において重要な取組である」と評価をいただいている。また一方で、もっと長期的な評価の必要性も示唆いただいた。具体的には、「幼児期の教育によって培った力が小学校中学年から高学年においてどのような影響を及ぼすのか」といったことである。これらについては、3年間の研究開発学校の指定期間内では限界があり、今後、附属小学校と共に継続した縦断的な研究を進める必要があると考えている。

尾道市立中庄幼稚園 平成25年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図るため、言葉の育ちに関わる内容を重視した接続期の始期・終期の設定に関わる研究を行うとともに、教育課程の連続性を明確化した教育課程及び指導方法及び適当な教材等の研究開発を行う。

2 研究の概要

幼児期の教育と小学校教育の言葉の育ちに関わる内容を重視した接続期における始期・終期の設定に関わる研究を行う。同時に地域の課題とされる子どもの思考力、判断力、表現力等を育む観点から小学校における「言語活動」に係る内容を手がかりにしつつ、言葉の育ちに関わる内容を重視した「学びの連続性」を確保する接続カリキュラムと指導方法や適当な教材等の開発を目指す。

研究にあたっては、上記に関して自園と関連する協力校のみならず、市内の幼稚園とともに共同研究を実施し、市内の幼稚園、保育所や小学校へも普及・啓発を図ることとする。その際、尾道市教育委員会が深く関わり実施していくものとする。具体的には、指定地域への指導、共同研究への指導、その成果等を普及させるための市内の公立・私立等を含む幼稚園・保育所・小学校を対象とした幼保小合同研修会を実施する。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

【研究の目的】

① 幼児の育ちの現状

少子化、核家族化、情報化等の幼児たちを取り巻く環境の変化を受けて、近年の幼児の育ちについては、基本的な生活習慣や態度が身に付いていない、他者との関わりが苦手である、自制心や耐性が十分に育っていないなどの課題が指摘されている。また、多くの情報に囲まれた環境にいるため、世の中についての知識は増えているものの、その知識は断片的で受け身のものが多く、言葉を使って自己の考えを深めていく力が弱くなってきていることや、学びに対する意欲や関心が低いとの指摘がある。

② 幼児期における言葉の育ちの重要性

言葉を使うには、日々の生活の中で思いを伝えたい、あるいは思いを聞いてみたいという相手との関わりが必要である。そして、伝えたいこと、聞きたいことが幼児の心の中に生まれていくことが最も大切になってくる。

平成20年に告示された幼稚園教育要領では、領域「言葉」の内容（2）が「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する」と「考えたり」という語が挿入され、内容の取扱い（2）では「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること」が新たに加えられた。また、領域「環境」の内容の取扱い（1）では「特に、他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること」という文言が加えられている。

このことから、思考力の芽生えを支える言葉の育ちや聞くことから生まれる、伝え合う楽しさが重視されていることが分かる。

③ 幼児期の教育と児童期の教育の円滑な接続の重要性

平成22年11月1日に出された「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（以下「報告書」）では「子どもの発達や学びの連続性を保障するため、幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続し、体系的な教育が組織的に行われることは極めて重要である。」また、「幼小接続の取組を進めるには、まず何よりも子どもの発達や学びの連続性を踏まえた幼児期から児童期にかけての教育のつながりを理解するための道筋を明らかにすることが必要である。」と述べられている。

さらに幼小接続の取組を積極的に進めるための方策として、「幼児期と児童期をつながりとして捉える工夫が必要であり、幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を『接続期』というつながりとして捉える考え方を普及することが必要である」とも述べられている。

本園は、平成23年度から3年間、文部科学省より研究開発学校の指定を受け、「言葉の育ちにかかわる内容を重視した学びの連続性を確保する接続カリキュラムの研究開発」に取り組んできた。本研究では、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るための接続期の設定を行うとともに、「接続期の教育課程（言葉）」「接続期の接続プログラム」「言葉の基盤形成にかかわる〈発達の姿〉」の作成を行った。

④ 言葉が育つ環境や援助

乳幼児の言葉の発達は、生活の中での親しい人とのやり取りを通して、質的にも量的にも目覚ましい変化を遂げていくと言われる。信頼できる大人との関係の中で、言葉を交わし合い、乳幼児の言葉は育まれていく。家庭でも、地域でも、幼稚園でも幼児の言葉は育てられ発達していく。それらの環境の中でも、幼稚園の特徴は、同年代の複数の幼児が集団の中で活動しながら育ち合っていくことにある。こうした園での生活では、親しい人の存在は初めは教師であるが、教師の援助を受けながら徐々に他の子供達へと変化していく。遊びの中で友達とのおしゃべりを通して、お互いが抱えているイメージを共有し、そのイメージを表す言葉を楽しく共有しながら、新たな言葉を獲得していく。そのため幼稚園では、教師が時期や幼児の発達にふさわしい環境や活動を計画的に準備し、幼児に関わったり、友達との関わりを援助したりして、豊かな言葉を育てていくことが求められている。

【研究仮説】

接続期の始期と終期を設定し、言葉の育ちに関わる内容を重視した幼児の発達や学びの連続性を考慮して指導方法を工夫すれば、自分の思いや考えなどを相手に分かるように話すなど、言葉による伝え合いができ、幼児期における幼児一人一人の学びの芽生えを確かなものにできるだろう。

- ① 幼児期・児童期の発達を踏まえた保育・授業場面でのエピソード、履歴等の集積・整理などを通して、言葉の育ちに関わる内容を重視した接続期における、始期・終期を明らかにすることができる。
- ② 幼稚園・保育所と小学校との交流活動やその活動を通して見える有効性について、言葉の育ちに関わる内容を重視した職員の合同研修を継続的に行うことにより、言葉の育ちに関わる内容を重視した接続期カリキュラムを具体化できる。
- ③ 言語活動を手がかりにして、言葉の育ちに関わる内容を重視した学びの連続性を確保する指導方法及び適当な教材等を開発する。そのことで、自分の思いや考えなどを相手に分かるように話

すなど、言葉による伝え合いができ、幼児期における幼児一人一人の学びの芽生えを確かなものにできる。

(2) 必要となる教育課程の特例

なし

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

① 幼児期と児童期の言葉を用いる形態の違いへの着目と教育課程の見直し

「報告書」には、「幼児期と児童期の教育活動には、学びの芽生えの時期と自覚的な学びの時期という発達段階の違いからくる、遊びの中での学びと各教科等の授業を通じた学習という違いがあるものの、直接的・具体的な対象との関わり、すなわち『人とのかかわり』と『ものとのかかわり』という捉え方で双方の教育活動のつながりを見通しつつ、幼児期における遊びの中での学びと児童期における各教科等を通じた学習を展開することが必要である。」と述べられている。

言葉の育ちに視点をあてた幼小の円滑な接続を行うためには、幼児期と児童期において、幼児や児童が自分の求める様々な目的実現のための手段としてどのように言葉を用いていくのかということに着目することは、とても重要なことである。

岡本夏木（著）『ことばと発達』では、言葉の発達において《一次のことば》と《二次のことば》を区別し、双方のことばの性質を明示するため、かなり典型化した形でコミュニケーションの形態の特徴が示されており（表1）、これが参考となる。

「一次のことば」「二次のことば」の特徴 (表1)

※ 一次のことば：「現実生活の中であって、具体的な事象や事物について、その際の状況文

コミュニケーションの形態	一次のことば	二次のことば
(状 況)	具体的現実場面	現実を離れた場面
(成立の文脈)	ことばプラス状況文脈	ことばの文脈
(対 象)	少数の親しい特定者	不特定の一般者
(展 開)	会話式の相互交渉	一方向的自己設計
(媒 体)	話しことば	話しことば 書きことば

脈に頼りながら、親しい人との直接的な会話のかたちで展開する言語活動」

二次のことば：「現実の場面を離れたところで言葉の文脈そのものに頼りながら、自分とは直接交渉のない未知の不特定多数者に向けて、さらには抽象化された聞き手一般を想定して一方的に展開する言語活動」

幼稚園では、遊びを通じた現実的な生活の場面の中で具体的状況に支えられ、親しい人との会話により、多くの言葉を獲得していく。一方小学校では、教科等による学習活動の中で、現実の場面を離れたところで表現することが求められ、しかも話す相手は親しい少数の特定者でなくクラスの皆に向けて話すことが要求されるなど、これまでの生活で獲得してきた言葉とはかなり質を異にする。

こうした違いにより、幼児が戸惑うことなく学びを連続していくためには、何よりも幼小の教師がその違いについて相互理解することが必要である。

このことに関して、「報告書」では、「幼児期の教育では、児童期における教育の内容の深さや広がりをも十分に理解した上で行われること、いわば、今の学びがどのように育っていくのかを見

通した教育課程の編成・実施が求められる。」と述べられている。そのためには、年長児という狭い枠の中で検討すべきものではなく、幼稚園教育3年間を通した保育の充実を行っていく必要がある。そのため、言葉の育ちを重要視した教育課程の見直しを行う。

② 接続期の設定

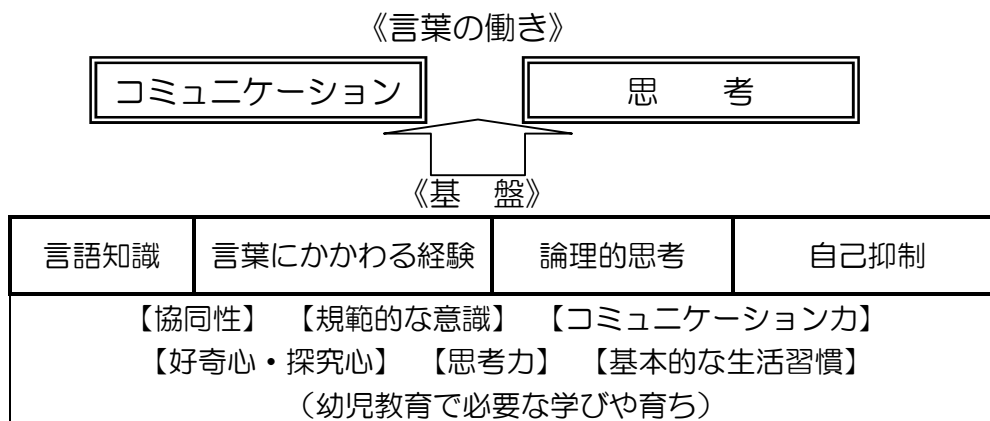
「報告書」では、「接続期」の始期・終期については、学校において適切な期間を設定して幼小接続の実践を工夫していくことが必要であることが述べられている。本園では、幼児期の学びの芽生えから児童期の自覚的な学びへのなめらかな移行を促していくため、5歳児の10月から小学校1年生の1学期終了までを「接続期」と設定し、研究を進める。

接続期の教育課程(言葉)の作成

接続期：言葉の育ちでの幼稚園と小学校の段差の解消を図りつつ、幼稚園生活で培ってきた言葉の育ちが、一層豊かになるような取組を意識的に重ねていく時期

言葉には《コミュニケーションの道具》《思考の道具》といった二つの働きがあり、その基盤は「言語知識」をはじめ、「言葉にかかわる経験」「論理的思考」「自己抑制」も大事な基盤であることが(平成20年「言語力育成協力者会議報告書」)から読み取ることができる。

下の図は、言葉の育ちに視点をあて、幼小の円滑な接続のために幼児教育において必要な力を付けることにより、言葉の働きの基盤の芽が育まれることを表している。



こうした基盤の芽を育てていくためには、幼稚園での3年間の教育を充実していくことが必要である。そのため本園では、3年間の言葉の育ちに視点をあてた教育課程(言葉)を作成し、教師が言葉の育ちを意識しながら保育実践に努めるようにした。

④ 接続プログラムの作成

年長児クラスになると、友達同士で自主的に目標をもち、お互いの関係を深めながらその達成に向け創意工夫しながら活動を展開する。そうした活動を通して、友達を思いやったり、自己を抑制しようとしたりすることにより人間関係をより深めていく。また、この時期は、幼児たちの言葉によるコミュニケーション力の向上や論理的な思考も徐々に可能になってくる。こうした状況を踏まえ、クラスやグループみんなで達成感をもってやり遂げる活動を計画的に位置付けるため、接続プログラムを作成した。

⑤ 幼小交流の年間計画の作成

幼小交流は、幼児が小学校生活に親しみをもったり期待を寄せたり、自分の近い将来を見通す

ことができるようになる。また、児童が幼児に伝わるような言葉を使ったり、幼児への関わり方を工夫したり、思いやりの心を育んだり、自分の成長に気づき自信を高めたりする機会になる。

本園では、1年生と年長児・年中児の交流を年間を通して計画的に行っている。交流での1年生と幼児とのペアづくりでは、幼児の発達段階を踏まえ年中児は年間を通してペアを固定し、年長児は活動ごとにペアを変えるようにしている。こうした交流活動を意義あるものにするため、幼稚園と小学校の教師とで年間計画を作成し、継続的な交流活動を行うことにした。

⑥ 人材活用

これまで保護者の協力は、園行事での手伝いをはじめ、夏祭り等のPTAの活動でお世話になってきた。研究開発を行うにあたり言葉の重要性に関心をもっていただくというねらいのもとで保護者の方に新たに以下のことについて協力をお願いすることにした。

□毎週水曜日の読み聞かせと本の貸し出し

- ・年間を通し、3人1組で全員が行う。

□家庭での幼児の言葉のエピソード収集

- ・夏季、冬季の長期休業中（保護者からのエピソードは、教師のコメントを付けて「ことばの玉手箱」として冊子にし、提出していただいた保護者の了解のもと全保護者に配布している。）

(2) 研究の経過

◆ 1年次の主な研究内容

- ・幼児期・児童期の発達を踏まえた保育・授業場面でのエピソード、履歴等の集積と整理及び学びの様相の収集
- ・幼児期の教育と小学校教育の言葉の育ちに視点を おいた 接続期の検討
- ・発達や学びの連続性を踏まえたプログラムの検討
- ・幼稚園教諭と小学校教諭の保育・授業研究の実施

◆ 2年次の主な研究内容

- ・言葉の力を育てる環境構成や活動の在り方を探る
- ・言葉の育ちにかかわる内容を重視し、学びの連続性を確保した接続期の教育課程と指導計画の策定・改善
- ・学びの連続性の確保に向けた、小学校との活動の場の設定及び言葉の育ちに視点を おいた 言葉の考察
- ・接続期の教育課程（言葉）の作成
- ・発達の学びや連続性を踏まえたプログラムの作成
- ・幼小交流の年間計画の作成

◆ 3年次の主な研究内容

- ・追跡調査の実施と検証
- ・幼稚園教諭と小学校教諭による乗り入れ保育の検証
- ・言葉の基盤形成にかかわる〈発達の姿〉の作成

(3) 評価に関する取組

第3年次	<p>① 保育・授業場面のエピソードを、「個の生活の充実」、「共同の生活の充実」、「協同的な遊び」の3つの視点から分析し、教育課程及び接続期の始期・終期が適当か検証する。</p> <p>② 幼稚園・保育所と小学校の交流活動のエピソードを、「個の生活の充実」、「共同の生活の充実」、「協同的な遊び」の3つの視点から分析し、教育課程が適当か検証する。</p> <p>③ 保育・授業・交流活動場面のエピソードを、教材、活動内容、指導方法が子どもの言葉に与えた影響について分析し、効果的か検証する。</p> <p>④ 運営指導委員会を開催し、大学教員や他校の教職員等より、3年間の研究について評価を受ける。</p>
------	---

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 幼児・児童への効果

言葉の育ちに視点をあて、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方についての研究開発とその取組についての検証を行った。

検証方法としては、「在園児の学び」と「小学校入学後の本園修了児の学び」に視点をあて、保護者アンケート、小学校教諭（1年担任）からの聞き取り、幼小教諭による幼児・児童の学びの観察等をもとに、運営指導委員より分析していただいた。

在園児の学びに関する検証

■ 在園児の言葉の育ちに関する検証

3歳児～5歳児の自由遊びや一斉保育、振り返りの時間でのエピソードを集積し、本園職員による分析を行った。その結果、個々の発達の違いはあるものの着実に、言葉の育ちを見取ることができた。

《3歳児》

- 遊びの広がりとともに、遊びの中で使う語彙の数が増加している。
- 入園当初は、「これ、わたしのだからね」に代表されるように相手に対して抗議するときに使われていた「ね」が、友達を少しずつ意識するようになり「つくってあげるね」「あっち、いこうね」といった友達関係の育ちを示す「ね」が使われることが増えている。
- 遊びの中で「～みたい」など、これまでの生活経験での知識のイメージを草花や落ち葉や枯れ枝といった自然物に再現した言葉が使われている。
- 友達関係の深まりとともに、友達の様子や表情を気にかけて、「どうしたん？」の声かけや、友達が休んだ時の「どうして～ちゃん やすんだん？」など、友達の思いや理由を聞こうとする言葉が使われだしている。

《4歳児》

- 遊びの広がりや友達関係の深まりの中で、自分の思いを少しでもわかってもらいたいという思いが、話し言葉の文構造から読み取れる。
- 友達や教師と話す時、「ねえねえ」や「あのねー」など相手の意識を自分に向ける言葉や、「それでねー」などの言葉を使って自分の思いを長々と話すようになっている。
- 自由遊びでは、「海賊遊び」など、想像上の遊びでのイメージを共有して会話を楽しむことができるようになっている。
- 「しんせきのいとこが、きのううちにきてとまって、きょういっしょにあそびにきて、あした

かえるの」など、昨日、今日、明日といった一連の流れを順序立てて話すこともできるようになっていっている。

《5歳児》

- 言葉によるコミュニケーションがかなり上手にできるようになっている。
- 「じゃー、これ、ぼくがする」など、グループで話し合う時、他の友達の思いも考えながら遊びをつくりだすための言葉の使用が多くなっている。
- 「なんで、このきのはっぱは、（あきになっても）おちんの」など、原因を知るための質問が日常生活のなかから出てきている。
- お客を案内するための掲示や遊びの仕方の掲示などに文字を使用し、書き言葉の芽生えが見られる。

■「子どもの言葉の育ち」に関する保護者アンケート

幼児の言葉は、園や家庭、地域などのいたるところで育つ。そのため、家庭での言葉の育ちについて、保護者の方に記述法で調査した。

《保護者の言葉の関心の高まりに関するもの》

- 親が悪い言葉を使うと子供は余計に使いたがります。自分の言葉遣いも気をつけないといけないと思いました。
- 「この言葉面白い」「こんなことが言えるようになったんだ」「こんな風に考えているんだ」と、子供の成長を知るきっかけになりました。
- おままごとのような「ごっこ遊び」が一番言葉の宝箱だと思う。その中には、普段の生活やルールがつまみついていて、おもしろい。子供の話をずっと聞いていられないのが悲しい。
- 言葉の選び方や使い方、そして意味が不明だったり、間違ったりすることもまだまだ多いですが、よく聞いてやってもっともっと話したくなるような状況にもって行ってやりたいと思います。
- 時々、子どもの面白言葉を日記に残しておくのも良いかなと思っています。

《幼児の言葉の育ちに関するもの》

- 「なんでかなー」「どうしてそうなるの?」とよく聞いてきます。
- 子供の言葉から生まれてくる世界は、本当に面白く、素晴らしく、こちらまでワクワクさせられ、まるで絵本の中に入り込んだような気持ちにさせられます。
- いろいろな空想に言葉が膨らみ続けたり、突然、大人顔負けほどの現実的な言葉を言ったり、こんな言葉の使い方も知っているんだとびっくりすることもあります。
- 入園した頃に比べると、言葉の数もぐんと増えたように思います。幼稚園での出来事も家に帰って話してくれるようになりました。
- 少し前の年齢では、発する言葉といえば、ほとんどが親の話す、教えた言葉だったものが、最近では親以外の人との関わりが増え、また、コミュニケーションも上手になったのか親の知らないうちに覚えてくる言葉の数も増えています。何より、今までは親から子へのドッジボール状態の会話が、キャッチボールに進化してとても楽しいものになっています。

小学校入学後の本園修了児の学びに関する検証

■小学校入学後の接続期での1年生（本園修了児）の姿

本園から小学校に入学した児童について、学校生活の様子について学級担任に尋ねた。小学校では言語活動を中核にすえた単元構成での授業づくりに努め、1年生ではペアでの話合いの機会を多く設けたり、教師の課題設定も児童が意欲的に参加できるように工夫したり、接続期

を意識した取組を行ったりしている。こうした中で、本園から小学校に入学した児童の学校生活の様子について学級担任に尋ねた。

- 本園の修了児は、幼小交流や小学校の保護者による読み聞かせ、さらには1年生の授業参観や児童の発表会などで小学校の訪問機会が多いため、小学校の生活に慣れるのが早い。
- 休憩時間になると、自分たちで集めたいろいろな大きさの石や草花や葉っぱをすりつぶして工夫し、イメージを共有しながら、幼稚園で体験した「ごっこ遊び」を継続している姿が見られる。
- クラス皆に向けて話をするには慣れていないが、ペアやグループでの話合いには積極的に参加し、自分の意見を述べている。
- お話づくりや書くことに興味をもっている児童が多い。

■旧5歳児クラス担任による児童観察

児童が学校生活に少しずつ慣れ始めた6月に、旧5歳児クラス担任が小学校に出向き授業観察を行った。児童は教師の話をしっかり聞き、隣の子との話合いも積極的に行う姿が見られた。授業の後、小学校生活について聞くと、休憩時間や給食、そして、学習のことなど、幼稚園と小学校との違う内容について生き生きと話をしてくれた。

■幼小の交流活動での1年生（本園修了児）の観察

本園では、幼児と児童の交流を年間通して計画的に行っている。こうした交流の中での1年生の様子について、大学の先生や幼小の教師で観察を行った。

- 交流に慣れていない児童は、ペアの幼児から離れ自分だけで楽しむ姿が見られるが、修了児は、幼児を気にかけ、幼児の思いを大切にしようとする姿が見られる。
- 3月まで園生活を一緒に過ごした安心感からか、修了児と幼児のペアでは、おしゃべりする姿が多く見受けられる。
- 振り返りの場面では、幼児の頑張ったところを皆の前で紹介するなど、幼稚園の時には見られなかった成長した姿が見られる。

■小学校1年生国語科での「おおきな かぶ」の初発の感想

1年生の7月に、「おおきな かぶ」の授業を行った。教師が範読後、児童が初発の感想を書いた。感想では、人物が繰り返し登場することの面白さや、「うんとこしょ どっこいしょ」のリズム感ある言葉に面白さを感じた児童が多かった。そうした中で、「わたしは、あんなちいさなねずみでも、なかまにはいればおおきなかぶもひっこぬけるんだなあとおもいました」や、「ぼくは、みんなでちからをきょうりよくしてかぶをぬいたのが、これはなしのいいところだとおもいました」の感想に代表されるように、「協力」や「小さなねずみ」の存在に目を向けた児童が4名いた。この4名の児童は5歳児クラスの時、「おおきな かぶ」の読み聞かせの後、芋パーティーで「おおきな かぶ」のお話を真似て「おおきな おおきな おいも」の話を創作し、パネルシアターを行った児童たちであった。「おおきな かぶ」で得た知識を自分たちの遊びの中に取り入れた体験が、主題に迫る初発の感想を生んだものと思われる。

授業後の感想では、クラスのほとんどの児童が協力することの大切さについての感想をもつことができている。授業の中での動作化や「おおきな かぶ」のイメージを膨らませる授業展開が子どもたちの想像力を高め、ペアトークを充実させる主体的な学びが、主題に迫る感想を導き出したものと思われる。

②教師への効果

■幼児の姿の確かな見取りと育ちに対応した教師の援助

言葉の育ちに視点を おいたエピソード集積や考察、保育カンファレンスを通して幼児の発達や学びの連続性を考慮した教師の援助を意識的に行うことができた。また、自然を取り入れた幼児自身の表現を大切に して遊び込める環境構成について学ぶことができて いる。

発達に応じた「育てたい言葉の育ち」を育む視点で、幼稚園教諭と小学校教諭が接続期を意識した取組をすすめることで、幼児への関わり方、言葉による援助についてどうあるべきか試行錯誤し、活動に関わる援助から小学校につなぐ見通しをもった指導法の工夫に努めることが出来るようになった。

■組織としての研究体制の確立

言葉に視点を おいた発達や学びの連続性について、方策を探る保育展開に組織として取り組むことで、教師間の連携が密になっている。保育内容や幼児のとらえ方、考察について話し合いの場が広がり、教師の言葉のありようについて幼児の姿を中心にした研修が深まっている。

■小学校との教育内容の相互理解

幼稚園・小学校との交流活動や乗り入れ保育・授業研究の実施を通して、発達段階に応じた教育内容、指導内容の相互理解と幼児や児童の見取りができるようになって いる。

③保護者等への効果

■園・クラス便りによる発信

日々の保育の様子を保育エピソードとして発信することで、保育内容や日々の幼児の遊び、葛藤する様子に関心が高まっている。また、エピソードの発信により、家での会話も増え、自然物や保育に必要な準備物を主体的に持って来る幼児、保護者も出てきている。

■園文庫・保護者による家庭でのエピソードの収集

園文庫活動における読み聞かせ活動に保護者に参加してもらうことにより、絵本を通しての幼児の言葉の育ちに関わることができ、家庭での読み聞かせが豊かになっている。

また、家庭でのエピソードの収集からは、幼児の発する楽しい言葉や大人では気付かない発見に幼児の成長を感じ、幼児の言葉を受け止め、大切にしていこうとするなど、言葉の育ちへの関心の高まりがみられた。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

- 今年度開発した「接続期の教育課程（言葉）」「接続期の接続プログラム」「言葉の基盤形成にかかわる〈発達の姿〉」について、内容の充実を図る。
- 幼児期の多様な体験を通しての遊びからの学びが小学校での学びにつながる教材の開発と、環境構成、教師の援助の工夫を継続して行っていく。
- 幼小の円滑な接続に向けて、幼稚園3年間の教育はもとより、接続期における協同的な遊びをさらに充実する。

1 言葉の基盤形成にかかわる〈発達の様〉

	3歳児									4歳児									5歳児									1年生																
	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7							
	1期			2期			3期			4期			5期			6期			7期			8期			9期			10期			11期			12期				幼小接続期						
過ごし方	園生活の流れや生活の仕方がわかり、生活が安定していく時期			身体を十分に動かしているいろいろな動きのある遊びを楽しむ、心地よさを味わう時期			教師や友達と親しみ、友達と触れ合いながら、安心して自分のしたい遊びに取り組み始める時期			いろいろな活動の中で思いや感じたことを自分なりに表現する時期			いろいろなことに興味や関心をもちながら教師や友達とかわかって遊ぶ時期			いろいろな経験を通してたくさんの友達と遊ぶことが楽しくなる時期			友達と一緒にいろいろな遊びを楽しみながら個々の力を発揮していきようになる時期			友達関係が広がり、お互いに自分の考えを出し合いながら遊びが発展していくようになる時期			年長になった喜びと自覚をもち、遊びや生活に取り組む時期			自分の力を発揮しながら、友達と力を合わせていろいろな活動に取り組むようになる時期			みんなで協力したり役割を分担したりしながら、目的を成し遂げる喜びを味わう時期			生活の中で必要な言葉を身に付け、自分の気持ちを表現すると共に、伝わる喜びや伝え合う心地よさを味わう時期				1年生になった喜びと自覚をもち、友達や先生等新しい出会いの中で伝え合う心地よさを味わうとともに、新しい生活環境や学習環境に慣れる時期			環境や集団にも少しずつ慣れ、自分で行動できるようになり、楽しい活動の中で自己の考えや思いを学習や生活の場面で表現しようとする時期			
心の育ち	安定感 安心感			自己表出 信頼感			自己表現 感じる心			自己発揮			思いやり 共感			葛藤			自己抑制 自己理解			他者意識			他者理解 自己コントロール 仲間意識 自尊感情			有能感																
個の生活の充実	<ul style="list-style-type: none"> ●生活に必要なあいさつの言葉を使おうとする ●教師や友達に親しみをもって話したり聞いたりしようとする ・生活の中で覚えた言葉を使う・きれいなものなど、心動かされたことを言葉にする①・⑧ ・思いのままを言葉にする② ・経験からくる見立てたことを言葉にする① ・絵を描くことから連想して言葉にする ・困ったことや必要なことを教師に言う ●教師の援助を得ながら思いや気持ちを伝えようとする ・イメージをもって見立てたことを言葉に表す⑦ ・言葉にならない思いをしきりで伝えようとする ・言葉以外のかわりを基盤としながら言葉でかわる ・友達と一緒にことや物を見付けて伝える⑥ ・体験したことや疑問に思ったことを自分なりの言葉で表す⑩ ●遊びや生活の中で文字や表示にふれたり思うままに表現しようとする ・自分のマークやクラスの印を覚える ・表示を見て遊んだり片付けたりする ・文字や表示の形を書こうとする ●●体験や遊びの心地よさを感じて、模倣しながら遊ぶ ・体験したことを遊びの中で表現する③・④・⑤・⑥ ・自分の世界で遊びこむ⑤ ・違いに気付いたことを言葉で表そうとする ・経験したことを話したり伝えたりする ●教師が読む絵本や紙芝居などに興味をもち、喜んで見たり聞いたりする ・絵本や紙芝居を読んでもらうことを喜び ・自分の好きな絵本を見たり、絵本を見て自分なりの言葉で表現したりする ・友達や教師にしてもらいたいことを言う⑨・「すごい」「きれい」など友達と共感する ・教師や友達の言葉をまねて使ってみる②・③ 									<ul style="list-style-type: none"> ●文字に興味をもち、教師の援助を得ながら、言葉や文を読もうとする ・絵本や紙芝居を見たり、聞いたりして楽しむ ・教師の話を楽しみをもって聞く ・絵本を読もうとする ・言葉遊びをする ・絵本・紙芝居を熱心に見たり聞いたりする ●遊びや生活の中でふれる文字や表示に興味をもち、真似をして表現しようとする ・ごっこ遊びに文字や記号を取り入れる⑩・⑪ ・教師の表示をまねて絵や文字で書く ・自分の名前や簡単な平仮名を読むことができる ・言葉の繰り返しやリズムの楽しさを感じる⑫ ・なぜなぞに興味をもち ●したこと、見たこと、感じたことを教師や友達に親しみをもって話したり聞いたりしようとする ・自分の考えや発見を教師や友達に伝える⑬ ・友達と体験しながら感覚や感情を言葉にする⑭ ・自分の思っていることを話したり、相手の言葉を聞くこととする⑰ ・気の合う友達と安心して言葉を交わし合う⑪・⑬ ・友達の言葉に耳を傾ける⑪・⑫ ・身近な虫を見つけたり、草花を摘んだりする中で、感じたことを教師や友達に伝えようとする⑫ ・生活体験を伝え合う ・発見を言葉にしなが遊ぶ⑬ ・共通の話題で会話する ●教師の援助を得ながら、言葉を使って思いや気持ちを伝えようとする ・教師の援助を得ながら、友達の思いや言葉に気付いていく⑫ ・感動や発見を自分なりの言葉にして教師や友達に伝える⑬・⑭ ・少人数で発想や情報をやりとりする ・気の合う友達と会話を楽しんだり、自分たちで話し合ったり決めたりしながら遊ぶことができる ・トラブルの場面で自分の気持ちを伝えようとする ・生活の仕方についてクラスで考える ・教師に仲介されながら自分の考えや気持ちをクラスの友達に伝える ・場やもののイメージを共有し、友達の思いを感じて遊ぶ ●たくさんの「伝えたい」という思いを言葉にしようとする⑧⑰ ・自分なりの言葉で友達への親しみを表す⑦ ・友達にされて嫌なことを教師に言葉で伝える⑫ ・親しい人や友達と嬉しい気持ちを共有しようとする⑨ 									<ul style="list-style-type: none"> ●「伝えたい」「知りたい」という思いをもって話そうとしたり聞こうとしたりする ・共通の話題で知っていることを話す ・経験から推測して話す、友達に自信をもって伝える⑯ ・自然への感動を言葉にする ・発見したことや驚きを言葉にする ・簡単なクイズを作る ・自分なりのイメージを言葉にする⑱ ・読み聞かせや好きな絵本を通して、物語の世界に多くふれる ・生活に必要な言葉としての標識や文字の機能に気付く ・身近な生き物に気持ちを寄せて言葉をつける ・しりとりや早口言葉などの言葉やリズムを楽しむ ・周囲の社会環境の記号やシンボルが認識できる ●線や記号、文字を使って表現しようとする ・ごっこ遊びのイメージを書いて知らせる ●教師や友達に自分から思いや気持ちを伝えようとする ・自分の思いや考えを自信をもって伝える⑳ ・「あれ」「これ」と抽象的な言葉でやりとりする ・友達の気持ちを察して言葉をかける ・いろいろな方法を考えて出し合う ・動作を伴った言葉で話す ・言葉で衝突を解決しようとする㉑ ・発見したことを教師や友達に伝える ・感じ考えたことを実践し、自分なりの言葉で伝える㉒ ・遊びのルールを考えて伝える ・自分なりのイメージを言葉にする。友達と共有する㉓ ●友達と共通のものやことについて話をしたり聞いたりする㉔ ・友達のしていることに関心をもち、取り入れる㉕ ・友達に考えを促し、相手の意見を意識する㉖ ・友達の思いを受け入れやり取りをする㉗ ・互いの思いを聞き、納得する方法を受け入れる㉘ ・周りの友達を意識して言葉を投げかける㉙ ・友達と共通のものや事について話をする ・友達のした遊びに関心を広げて話す㉚ ・遊びや楽しさを共有した言葉を表す㉛ ・友達と共通の話題で自分の気持ちを話したり聞いたりして、取り入れてみる㉜ ・1年生の話し方を聞いて真似たり言葉を選んで相手に伝えようとする 									<ul style="list-style-type: none"> ●●文字に関心をもち、平仮名や片仮名で書かれた言葉や文を読もうとする ・童話に親しむ ・文字や書き言葉に興味をもち、文字の形を認識する㉞ ・友達と手紙を書いたり、自分の気持ちを文字で表そうとしたりする ・知らない言葉に興味をもって聞く㉟ ・イメージして言葉を選び、話のストーリーを広げていく ・遊びの中で文字が表す意味に気付く㉞ ●線や記号、文字などを使うことを楽しんだり、伝えたいことを表現しようとしたりする ・だじゃれや言葉遊びなどを作ってリズムやごころ合わせを楽しむ ・俳句を作る ・文字の表す意味に気付く、書きたい思いが具体的になる㉟ ・言葉のリズムを意識して文を考える ・興味のあることを書きとめる ・自分の考えを相手に提案したり聞いたりする㉡・㉢ ・場に応じた言葉を選んで話す ・言葉をあいまいにして相手と交渉しようとする㉢ ・テンポよく、言葉での掛け合いを楽しむ㉣ ・カルタ、すごろく遊びをする ・本物らしさにこだわる㉤ ・簡単な創作の話を作る ・劇遊びの中で話を考えたり、繋げたりする ・長いお話を喜んで聞き、話の続きを作ったり、表現したりする ●「伝えたい」「知りたい」という思いをもち、分りやすく話そうとしたり聞こうとしたりする ・3歳児の思いを受け入れ、分かるように言葉や動作を工夫して伝える㉦ ・友達の頑張る姿を応援したり励ましたりする ・友達のしていることに意見を言う ・友達やいろいろな人とのやり取りを楽しむ ・性質への気付きを言葉にする・共通の話題で話を進める ・大事なことをのがさないよう興味をもって聞く ・状況や相手に応じて丁寧な言葉で話す㉧ ・自分の役割や場に応じた話し方をする㉨ ・共通のものやことについて考えを出し合い、やり取りを楽しむ ●気付きや思いを伝え合おうとしたり遊びがより楽しくなるように話し合おうとしたりする ・身近な事柄について話題に沿って話し合う ・共通の体験からさらにイメージを広げ言葉にしてい ・活動に見通しをもち工夫したり考えたりしたことを伝え合う ・友達の行動に対して言葉で解決しようとする ・目的を共有した中で考えを伝え合う ・友達と役割分担をしながら遊びを進める㉩ ・グループの仲間を意識して話したり、行動したりする㉪ 									<ul style="list-style-type: none"> ●●言葉や文字に関心をもち、平仮名を書こうとする ・絵や記号、文字などを使って、メモしたり書いたりして、相手に分かるように表現する ・相手や場面に合わせて、言葉を選んであいさつをする ・伝えたいことを絵日記に表し、三文以上で詳しく書く ●本に興味をもち、読み聞かせを楽しんだり、読みたい本を選んで読んだりする ・本を読んで内容を読み取り、お話の世界を楽しむ ・物語を読み、話の続きを考える ●楽しかったことを先生や友達に伝える ・主語、述語を使って、場に応じた話し方を工夫する ・接続語、指示語を使って詳しく話す ・みんなの前で丁寧な言葉遣いで話す ・短い言葉で、見たことを記録する ・学校の先生や上級生のお兄さんやお姉さんに、進んで話しかけたり、かかわったりする ●●身近な人や物を思いうかべながら書いたり、伝えたりする ・自分の思いを助詞を使って文に整理して話したり、書いたりする ・絵や物を見て、気持ちや場面を想像して、話す ・共に生活する人々に、自分の思いや伝えたいことを素直に伝える ・ことは集めやしりとり・クロスワードを楽しむ ・見つけたものや楽しかったことを絵や文で説明したり、お話にして劇など全体を使って、表現する ・アサガオの様子を観察し、色や硬さを比較や比較、数を使って、記録する ・実際に体験していないことを絵や言葉から想像し、関連付けて考えて話そうとする ●「伝えたい」「知りたい」という思いをもち、相手意識を持って分りやすく話そうとしたり聞こうとしたりする ・経験と比べて推測し、判断する。順序立てて話す ・園児に分かるような言葉を考えて、選んだりして話をしたり聞いたりする ・相手の思いを聞いて、受け入れながらやり取りをしようとする ・みんなの前で知らせたいことを進んで紹介し合う ・第三者を意識して、伝えたいことを簡潔にまとめ、敬体で話す ●話題に沿って気づきや思いを伝え合おうとする ・友達の考えに同意したり、反論したりして、共通の話題について、理由をつけて、互いに意見を伝えたり、考え合ったりする ・作戦を考えながら、仲間とボール遊びを楽しむ ・相手を意識し、反応に合わせて分りやすい言葉で伝えようとする ・自分の見つけたものや発見したことを数字や記号など相手に分りやすい方法を工夫し表現する 							
共同の生活の充実	<ul style="list-style-type: none"> ●話し・聞く ●書く・伝える ●伝え合う ●読む 																																											
協同的な遊び																																												

①～㉞は実践事例エピソード番号である

福井県保幼小接続プロジェクト

「学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム」ー学びに向かう力をはぐくむー

I 総則【全体カリキュラムと解説】

学びに向かう力の育成

ー「学びの芽・約束の芽」から「自覚的な学び」へー

全体カリキュラム作成の目的

福井県保幼小接続カリキュラムは、福井型18年教育を見通し、長い目で見て子どもの育ちを実現するために作成したものです。

これまで「カリキュラム」と言えば、教育内容を学習段階に応じて配列した教育課程を意味していました。しかし、保幼小の子どもの学びをつなぐカリキュラムは、この概念の枠組みで表すことができません。それは、「幼児期の1領域」と、「小学校の1教科の内容」を1対1で対応させてつなげようとする教育課程では、幼児期の「総合的で主体的な遊びから学ぶ」という本質を表しきれないからです。

そこで、福井県は、福井型18年教育のスタート期として、「子どもが自ら遊び学ぶ経験」の総体を「カリキュラム」として位置づけています。

保育士・幼稚園教諭・保育教諭（以下、保育者）が「子どもがこれからどのように育つのか」を見通し、小学校教諭が「子どもがこれまでどのように育ってきたのか」を理解し、お互いに「今、目の前の子どもたちとどうかかわればよいか」を考え学び合うために、「全体カリキュラム」を作成しました。

保育者・小学校教諭が共に、幼児教育と小学校教育を連動させる保育・教育の在り方を考えるために、子どもの成長（変容）する姿をキーワードでつなぎ、5歳児と小学校1年生の2年間を通して、子どもの「学びに向かう力はどう育つのか」の基本的な考え方を明示しています。

21世紀型の学力に向けて、教科の目標のさらに基底にある教科共通の力を、「学びに向かう力」としてとらえ、福井型18年教育の出発点の核としています。

「学びに向かう力」について

福井県保幼小接続全体カリキュラムは、5歳児と小学校1年生の2年間に焦点をあて、「学びに向かう力」の育ちを見通すものです。

「学びに向かう力」とは、友達と共通の目的や課題に向かって、子ども自身が主体的に遊びや活動を発展させていく力のことです。

幼児期の終わりと児童期の始まりの2年間は、集団の中で協同的に学び始める時期であることを踏まえ、友達と一緒に力を合わせ、難しいからこそ挑戦しようとし、工夫し、成し遂げようとする力を育てることを大切にしていきます。

幼児教育では、「学びに向かう力」は「遊び」の中で育つものであり、子どもが自ら環境とかかわり、子ども自身が遊び・活動を発展させていく中で育つ力としてとらえています。そしてこの力は、楽しみ、試し、工夫し、見通しを持つなど、子どもたちが友達と力を合わせて遊びを進める中で培われていきます。

小学校以降の授業は、この「学びに向かう力」をもとにして成立します。活動にかかわらず、対象や課題に向かう「意欲」「集中力」「持続力」等が「学びに向かう力」です。子どもが自分の興味・関心に基づいた活動に夢中になって取り組み、課題を発見したり、調べたり、友達と力を合わせたり意見を交流したりするなどして学習を深めていき、さらに「学びに向かう力」が培われていきます。

「学び」は、子どもの内面の変容であり、その育ちは子どもの表情や言葉、動き、文章や絵等、様々な行為として表現されます。

「学びに向かう力」を培うためには、一人一人の学びの表現を丁寧にとらえ、「子どもが何に気づいているのか」「どう支えればよいのか」等、保育者、小学校教諭の見取りを確かなものにしていく必要があります。

子どもの育ちを見通した上で、適時性を持ったかかわりや環境を考え、子どもの中の「学び」を促すことを強く意識しながら、遊びや授業を展開していくべきでしょう。

幼児教育・小学校教育の実践の中で、様々な子どもの姿と向き合い、「学びに向かう力」を確実に育てていくことが重要です。

「学びに向かう力」の柱となる考え方について

学びに向かう力

友達と共通の目的に向かって、子ども自身が主体的に遊び・活動を発展させていく力のこと

- 自分の思いを伝え合って、友達と力を合わせる
- いろいろなものに興味を持って、おもしろさを感じる
- 自分の力を出したり、我慢したりして、調整する
- 集中したり、根気強く取り組んだり、工夫したりする

学びの芽

環境へのかかわりを通して、楽しみ、試し、工夫し、見通しを持つ等、意欲を持って遊びや学びを進め、様々な気づきを得ること

伝え合い（友達と自分）

友達や保育者・教師の話聞き、自分の考えを話そうとし、学びの過程を共有すること

習慣（自分づくり）

生活習慣を基盤として、活動の始めと終わりを意識し切り替える等、学習のための習慣が身につくこと

約束の芽

友達や保育者・教師とかかわり、集団で楽しむためのルール等の必要性に気づき、自己を調整していくこと

思いやり（友達と自分）

お互いに自分の気持ちを出して、思いの違いに気づき、相手の立場に立って考えること

思いの言語化（自分づくり）

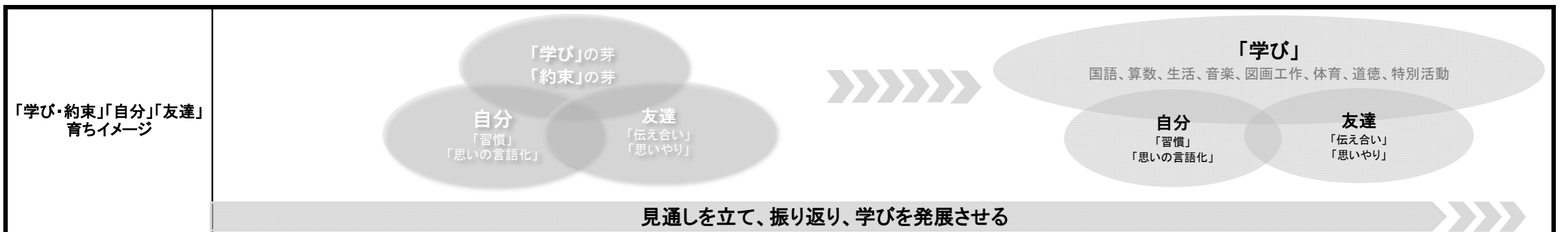
自分の気持ちを言葉にして相手に伝え、自分の気持ちを調整し、かかわりを深めること

福井県保幼小接続【全体】

保幼・小区分	「5歳児」の育ち(保育所・幼稚園・認定子ども園)				「1年生」の育ち(小学校)		
	年長Ⅰ期(4~5月)	年長Ⅱ期(6~9月)	年長Ⅲ期(10~12月)	年長Ⅳ期(1~3月)	小1Ⅰ期(4~5月)	小1Ⅱ期(6~10月)	小1Ⅲ期(11~3月)
協同して学ぶ姿(特徴)	年長組の一員として、保育者、友達、異年齢児と一緒に遊ぶ	友達とのつながりを深め、思いを出し合い、遊びを発展させる	友達と共通の目的を持ち、力を合わせて遊ぶ	友達と協力して、お互いのよさを認め合い、遊びを進める	学校生活に求められる行動を学び、友達と楽しく意欲的に過ごす	友達と触れ合い、良さを実感し、ペアやグループで活動を進める	友達に自分の考えを伝え、友達の意見も聞いて、協力して活動する
友達との協同	「楽しむ」	「遊び込む」	「力を合わせる」	「分かち合う」	「適応する」	「活動を広げる」	「学び合う」

伝え合い	友達	自分の思いや考えを動きや言葉で素直に表現する	相手の言葉を受け止めて、内容に応じたやりとりをする	自分の思いを伝えるだけでなく、人の話も聞こうとする	みんなに話す言葉を、自分に話す言葉として聞いて行動しようとする	自分のことを話し、先生や友達の話最後まで聞こうとする	気づきや疑問を言葉にして伝え、問題を解決しようとする	自分の思いや考えを友達に分かるように話し、友達の考えを受け入れようとする
学びの芽 「言葉」「数」「自然」		「試す」 身体を十分に動かし、五感を働かせ、興味を持って様々な遊びにふれる	「集中する」 集中し、根気強く取り組み、試行錯誤し、夢中になって遊ぶ	「工夫する」 気づきやアイデアを出し合い、友達と一つのことに取り組み、実現する喜びを味わう	「挑戦する」 身近な環境等に関心を持ち、自ら関わりを広げ挑戦する	「学習に興味を持つ」 初めて出会う事象に「おもしろい」と感じて取り組む	「学習に意欲を持つ」 問題を「解いてみたい」という意欲をもつ	「課題を実行する」 与えられた課題を自分のものとして受け止め、やってみようとする
習慣	自分	挨拶や身の回りの整理整頓など、自分でできることは自分でやる	遊びの活動時間を意識し、気持ちを切り替えて行動する	身体を十分に動かして遊び、着替えなどを自分でやる	生活の流れに見通しを持ち、遊びや食事などの準備や片付けをする	挨拶や団体行動が身に付き、自分で使うものの片付けをする	授業と休み時間の区別をして行動する	教室や校庭、掃除場所で、生活の流れや見通しを持って行動する
遊びや体験を通して、挑戦・集中・工夫する					教科を通して学び、意欲を持って課題に関わる			

思いやり	友達	友達とふれあいを通じ、相手の気持ちを感じる	友達とのかかわりを楽しみ、友達の良さに気づく	友達や祖父母、地域の人等との交流を深め、感謝の気持ちを持つたり、相手の気持ちを考えたりする	友達のがんばりを認め、困っている友達を助けようとする	係活動など自分のやるべきことを自覚してやろうとする	友達の立場から自分自身の立場を振り返る経験を通して、友達の気持ちを大切に行動する	お世話になっている人への感謝の気持ちを自覚する
約束の芽		「感じる」 友達と気持ちよく過ごすためのきまりの大切さに気づき、自分から守ろうとする	「折り合う」 様々な感情体験をし、友達との思いの違いに気づき、思いを調整して解決しようとする	「協同する」 友達のよさや興味・関心の違いに気づき、ルールを考え、力を合わせて遊ぶ	「見通しを持つ」 年長児としての役割を担い、見通しを持って行動する	「出合いを楽しむ」 新しい友達と気持ちのよい挨拶等を交わし、かかわりを楽しむ	「役に立つ」 友達や家族の役に立つ喜びを感じる	「共に行動する」 友達と仲良く過ごし、みんなできまりを守って過ごそうとする
思いの言語化	自分	保育者や友達に自分の気持ちを言葉で表す	分からないことや聞きたいことを自分の言葉で話そうとする	友達や異年齢児も楽しめるよう考え、伝えようとする	遊んだことや工夫したことを振り返って話そうとする	教員や友達に思っていること、困っていることを話す	自分の考えを友達の意見に加えて話したり、事実の展開を分かりやすく話したりする	できるようになったことや成長したと思えることを話す
振り返り、思いを感じ、違いに気づき、認め合う					多様な考えを認め合い、相手のことを考えて行動する			



1年生終期を目標に保幼小接続のカリキュラムを作成

「学びに向かう力」…友達と共通の目的に向かって、子ども自身が主体的に遊び・活動を発展させていく力のこと
 「学びの芽」…楽しみ、試し、工夫し、見通しを持つ等、遊びや学びを進め、様々な気づきを得ること
 「約束の芽」…友達や保育者・教師とかかわり、集団で楽しむためのルール等の必要性に気づき、自己を調整していく行為のこと

「伝え合い」…友達や保育者・教師の話聞き、自分の考えを話そうとし、学びの過程を共有すること
 「思いやり」…お互いに自分の気持ちを出して、思いの違いに気づき、相手の立場に立って考えること
 「習慣」…生活習慣を基盤として、活動の始めと終わりを意識し切り替える等、学習のための習慣が身につくこと
 「思いの言語化」…自分の気持ちを言葉にして相手に伝え、自分の気持ちを調整し、かかわりを深めること

学びに向かう力

Ⅱ 内容【内容カリキュラムと解説・展開例】

5歳児の遊びと1年生の学びの連続性

—内容「言葉」「数」「自然」「約束」の視点から—

5歳児の遊びと1年生の学びの連続性

幼児期と児童期の教育には、発達段階の違いだけでなく、教育課程等の相互理解が必要です。内容カリキュラムは、「5歳児が遊びで経験する内容」を明確にして構成しています。

【幼児期と児童期の教育課程の違い】

幼児期の保育・教育	児童期の教育
○各教科、道徳、特別活動等の区別がない。	○各教科、道徳、特別活動等の区別がある。
○児童期以降の教育の方向付け（心情、意欲、態度等）を重視する。 ～を感じる ～楽しむという表記	○具体的な目標への到達を重視する。 ～することができるという表記
○子どもの生活や経験を重視する経験カリキュラム	○学問体系の獲得を重視する教科カリキュラム
○環境を通して行う。 ○遊びを通した総合的な指導である。 ○遊びが学びそのものであり、遊び込むことができる環境を構築することが重要である。	○各教科等から構成される時間割に基づく。 ○学級単位の集団指導が中心である。 ○子どもが目標に到達することができるようにすることが重要である。

【保幼小接続 内容カリキュラムの特徴】

◎学びの芽の内容「言葉」「数」「自然」「約束」について、10項目ずつの基本的な内容を示す。	◎教科の内容「国語科」「算数科」「生活科」「道徳」「特別活動」に焦点をあて、5歳児との体験のつながりを示す。
◎内容に即した5歳児の遊びと環境構成を中心に示す。	◎5歳児の内容カリキュラムとつながる1年生の学びの内容を示す。

5歳児の重点内容について（言葉・数・自然・約束）

5歳児の内容は、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を踏まえ、以下の視点で「5歳児が遊びを通して身につける基本的な内容」について示したものです。

- ① 5歳児が夢中になって遊ぶ中で気づきが得られるもの
- ② 子ども自身が遊びを発展させる中で感じることのできるもの
- ③ 文字・数・自然等の気づきを生み出し、小学校につながる学習の芽生えの要素が含まれるもの
- ④ 多様な学びを促す活動
注) 小学校の学習の前倒しではないもの

【言葉・数・自然・約束のねらい】

言葉	○園生活での状況と関連付け、文字の役割や意味を理解する。 ○絵本の読み聞かせ等を通して、言葉のリズムやそれらを使う楽しさを知り、話の筋道や内容の理解、文字を読む意欲を持つ。
数	○園生活や遊びの中で、数や量等に関心を高める。 ○生活やゲーム等の中で、簡単な数や量の感覚を理解する。
自然	○自然や生き物の不思議さや生命の大切さを感じる。（生き物・植物） ○自然物に触れて楽しみ、好奇心や探究心を抱く。（自然物） ○素材や道具等にかかわり、性質や仕組みに興味関心を持つ。（人工物）
約束	○自分の力で行動する喜びを味わい、自立心を持ちながら協同する経験を重ねる。（協同） ○友達と思いを出し合い、折り合いをつけ、きまりの必要性に気づき、気持ちを調整する。（自己調整）

福井県保幼小接続【内容】

	5歳児（福井県の重点内容に即した5歳児の遊びと環境構成を中心に示す。）				1年生（5歳児の内容カリキュラムとつながる1年生の学びの内容を中心に示す。）			
共通点	<ul style="list-style-type: none"> ・生涯にわたって自ら学ぶ態度を培う「学びの基礎力の育成」の時期である。また、「学びの芽生え」から「自覚的な学び」へと発展していく時期であり、「学びの芽生え」と「自覚的な学び」の調和のとれた教育を展開することが重要である。 ・直接的・具体的な対象（人やもの）とのかかわりの中で教育活動を行うことが大切であり、幼児や児童が自分の興味・関心に基づいた活動に夢中になって取り組む中で、課題を発見し、調べることによって遊びや学びを深めていくことができる。 							共通点
相違点	遊びを通した気付き				教科を通した学び			相違点
	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科、道徳、特別活動などといった区別がない。 ・心情・意欲・態度などについて「～を味わう」「～を感じる」など、その後の教育の方向付けを重視する。 ・幼児の生活や経験を重視する経験カリキュラムに基づき展開する。 ・保育者が「環境」を通して行う教育であり、幼児の自発的な活動を重視するとともに、遊びを通した総合的な指導が必要である。 				<ul style="list-style-type: none"> ・各教科、道徳、特別活動という区別がある。 ・「～できるようにする」といった具体的な目標への到達を重視する。 ・学習課題の克服を重視する教科カリキュラムを中心に展開する。 ・指導者が教育すべき内容を具体化した効果的な指導を行うことにより、児童が目標に到達することができるようになることを重視する。 			
時期	年長Ⅰ期（4月～5月）	年長Ⅱ期（6月～9月）	年長Ⅲ期（10月～12月）	年長Ⅳ期（1月～3月）	小ⅠⅠ期（4月～5月）	小ⅠⅡ期（6月～10月）	小ⅠⅢ期（11月～3月）	時期
言葉	園生活での状況と関連付け、文字の役割や意味を理解する。絵本の読み聞かせなどを通して言葉のリズムやそれらを使う楽しさを知り、話の筋道や内容の理解、文字を読む意欲をもつ。				順序を考えながら話したり聞いたり読みたり書きたりする。平仮名や片仮名、配当漢字を読み、姿勢や筆記用具の持ち方に気を付けて書く。			国語科
	言1 絵本に興味・関心を広げられるように、保育者が読み聞かせを毎日継続する。 言2 保育者が保育室に絵本コーナーを設置し、絵本に触れる意欲を促す。	言3 しりとり、なぞなぞなど、言葉やリズム、やりとりなどを楽しむ言葉遊びをする。 言4 保育者が子どもの言葉をよく聴き、豊かな言葉にして返す。 言5 絵や線を描く動きを豊かにする遊びをする。	言6 話し合いで決まったことや予定などを書いておき、保育室にあるひらがなの言葉を増やす。 言7 おはしの持ち方の練習を行い、鉛筆の持ち方の基礎を身に付ける。	言8 カルタ遊びをして、文字や言葉に興味・関心を広げる。 言9 保育者が文字を書くところを見せる。 言10 小さな枠の中に絵や模様を描く遊びを取り入れる。	国1 「どうぞよろしく」で自分の名前を丁寧に書き自己紹介をする。 国2 「はなのみち」で想像を広げながら物語を楽しむ。	国3 「あいうえおであそぼう」でリズムよく読み、自分たちの「あいうえおであそぼう」を作る。 国4 「おおきなかぶ」を楽しんで音読し、想像を広げながら読む。 国5 「ひらがなあつまれ」で、平仮名を読み書き、言葉を探してノートに書き紹介する。	国6 「もののなまえ」でおみせやさんごっこをし、物の名前や絵をカードに書き、ちらしを考えて作り、売り買いのやりとりをする。 国7 「てがみでしらせよう」で経験したことから書く題材を選び、文と文の続き方に注意して手紙を書く。	
数	園生活や遊びの中で、数や量などに関心を高める。生活やゲームなどの中で、簡単な数や量の感覚を理解する。				数・量・図形などについて感覚を豊かにしたり経験を重ねたりする。数・加法・減法を理解する。数量やその関係を言葉、数、式、図などに表し、読み取る。			算数科
	数1 指さしのリズムと口のリズムが合うように、一つずつ数える遊びをする。 数2 大きい小さい、長い短い、多い少ないなどを比べる機会を持つ。	数3 縄跳びの跳ぶ数など、続けて数える遊びをする。 数4 一つずつ数が増えたことが分かる遊びをする。 数5 身近ないろいろなものを測る。	数6 身近な量の一番を見つける遊びを行う。 数7 玉入れなど、量の大小と数の大小を同時に比べる遊びを行う。 数8 少ない数で「合わせていくつになるか」クイズをする。	数9 5のまとまり、10のまとまりのゲームを行う。 数10 買い物ごっこなど、お金を使う経験を取り入れる。	算1 「かずとすうじ」で、絵に数図ブロックを1対1で対応させて置いて教え、数字で表す。 算2 「いくつといくつ」で10までの数の合成分解をし、10の補数について求める。	算3 「たしざん（1）」で身近な場面でたし算ができる場面を見つけたし算を用い、たし算の式に表して正しく計算する。 算4 「大きさをくらべ」で長さや面積などの大きさに関心をもち、比べ方を考えて比べる。	算5 「大きいかず」で120ぐらいまでの数について、読み書き、大きさを比べ、10のまとまりで数の合成や分解をする。 算6 「かえますか？かえませんか？」で、買い物の場面で、買えるか買えないかを見当をつけて判断をする。	
自然	自然や生き物の不思議さや生命の大切さを感じる。自然物に触れて楽しみ、好奇心や探究心を抱く。素材や道具などにかかわり、性質や仕組みに興味・関心をもつ。				具体的な活動や体験を通して、社会、自然、人々とかかわりに関心をもち、自分や生活について考える。その過程で生活上必要な習慣や技能を身に付ける。			生活科
	自1 身近な草花や生き物に親しみ、自然の不思議さに気付く遊びをする。	自4 野菜や花の特徴や成長に興味を持って世話をする。	自6 小動物や生き物に親しみ命の大切さに気付きながら世話をする。	自9 雪遊びや生活の変化など、雪や氷、冬の自然のおもしろさや不思議さに気付く遊びをする。	自10 ステンドグラスや影踏み遊びなど、光と影に興味を持ち性質に気付く遊びをする。	生1 「花をさかせよう」で育ててきた植物の成長に気付き親しみをもって大切に育てる。「むしとなかよし」で虫を探し生息している場所の特徴に気付き大切に飼う。 生2 「つちやすな、みずであそぼう」で土や砂、水を利用して遊び、水の性質の不思議さや、水で遊ぶ楽しさに気付く。 生3 「こうえんであそぼう」でいろいろな人が利用する場所で、ルールやマナーを守って、遊具や自然物でみんなで遊ぶ楽しさに気付く。	生4 「あきとなかよし」で、秋の自然や身近にある物を利用して、工夫しておもちゃや飾りを作って遊びおもしろさや自然の不思議さに気付く。 生5 「ふゆをたのしもう」で冬の風や日差し、雪などを体全体に感じ取り、自然で遊ぶおもしろさや自然の不思議さに気付く。 生6 「あたらしい1ねんせいをむかえよう」で園児に学校のことを教え、遊ぶ中で、園児と1年生の違いに気付き、自分の成長を感じることができる。	
約束	自分の方で行動する喜びを味わい、自立心を持ちながら協同する経験を重ねる。友達と意思を出し合い、折り合いをつけ、きまりの必要性に気付き、気持ちを調整する。				仲よく助け合い、自分たちで役割を分担し協力する。みんなで過ごすための約束を守り、よりよい方法を工夫し、友達のことを考えて行動する。			特別活動
	約1 伝承遊びや運動遊びなど、様々なルールのある遊びをする。 約2 異年齢児とかかわって遊ぶ機会を増やす。 約3 みんなで使うものや公共ものの使い方を考える。	約4 的当てゲームやひょうたん鬼など、ルールを作る遊びをする。 約5 お互いに譲れない時に話し合うなど、折り合いをつける経験をさせる。 約6 友達が怒った理由を聞いて仲直りするなど、言葉を交わして解決する経験をさせる。	約7 大勢の友達がかわる遊びを通して、ルールなどを工夫しながら遊びを発展させる。 約8 どろけいなど、チームに分かれて楽しむ遊びをする。	約9 大縄跳びなど、みんなで力を合わせる遊びをする。 約10 小学校へのあこがれを育てる遊びや活動をする。	特1 手つなぎ鬼やこおり鬼など体の触れ合いのある遊びを楽しみ、友達と仲よくなる。 特2 「みんながここにこ」でみんなが使う場で気持ち良く活動し、約束やきまりを守ることについて考える。	特3 どろけいやドッジボールなど、チームで協力してする遊びを楽しみ、いろいろな友達と協力し友達のよさを知る。 特4 「はたらくことのたのしき」で働くことのよさを感じ、みんなのために働こうとする気持ちをもつ。	特5 色鬼や線鬼など、場所や人数を考えながらルールを話し合って決め、みんなでより楽しめるようにする。 特6 「こまっているともだちに」で友達の気持ちを考え、これまでの自分のことを思い出して、友達と仲よく助け合って生活していこうとする。	
展開例	「泥団子遊び」	「鬼遊び」	「転がし遊び」	「雪遊び」	「どきどきわくわく1年生」「学校大好き」	「なつとなかよし」「おおきなかぶ」	「おみせやさんごっこをしよう」	展開例
保育者のかかわり	モデル ○経験したことのない遊びにも興味関心が広がり、やってみようという気持ちを引き出すことが大切である。	仲介者 ○友達同士の言葉のやりとりで、考えや思いを出し合って遊びを発展させていくことが大切である。	中継者 ○友達と相談し合い、遊びを工夫する中で、自分達の願いが実現する喜びを味わうようにすることが大切である。	司会者 ○遊びを振り返りながら、集団のめあてや約束、友達と一緒に乗り越える達成感などを共有することが大切である。	設計者 ○安心感をもって過ごせるように、また興味を持って授業に参加するように単元・授業構成や授業の時間配分、学習方法などを工夫することが大切である。	アイディAMAN ○意欲的に学習するように、いろいろな学習方法を取り入れ、できることや分かることの喜びを感じさせる評価の工夫をすることが大切である。	つなぎ手 ○お互いの良さを認め合い、学習のつながりを意識して学習に見通しをもって取り組み、自分や友達の成長を感じることができるように工夫することが大切である。	教師のかかわり

鳴門教育大学附属幼稚園 平成25年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

幼児期から児童期にかけての子どもの発達や学びの連続性を科学的思考力の視点で捉え、接続期にふさわしい指導方法やカリキュラムを開発するなど、幼児期から児童期への円滑な接続を図るための教育課程等の研究開発

2 研究の概要

幼児期から児童期（年長児9月から1年生7月まで）を一つの枠組みとした接続期を設定する。二つ目としては、幼児期の遊びを通して育つ科学的思考力を分析・検討し、児童期の生活科を貫き理科につながる教育課程や指導方法を開発するものである。具体的には、①幼児期の遊びを通して育つ科学的思考力を、文字や言葉・数量や図形・協同性などの視点で分類し分析を行う。②幼児期に育つ科学的思考力が、小学校における生活科や理科等の学習にどのようにつながっているかを①と同じ視点で分類し分析を行う。③分析した実証的データをもとに、接続期にふさわしい幼小接続の教育課程や指導方法の開発を行うものである。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

これまで蓄積してきた研究成果をもとに、学びの連続性や科学的思考力に視点を当てた接続期の教育課程や指導方法の開発を行うことを目的とする。

幼稚園の遊びや生活の中で、一人一人の子どもに育つ力の分類や分析を行うことで、幼児期に育てなければならないものや児童期へとつなげるものを明らかにする。そうすることで、接続期にふさわしい教育課程や指導方法などが明らかになり、子どもの学びの連続性の保証や接続期に不可欠な教員の力量形成を可能にすることであろう。

（2）必要となる教育課程の特例

特になし

（3）研究成果の評価方法

研究開発評価は、鳴門教育大学幼年発達支援コースの教員はもとより、教職大学院の教員や大学院生、学校関係者評価委員などに評価を求めるとともに、毎年開催している研究発表会で研究の成果を問う。アンケート調査は、幼児や低学年児童のみならずその保護者にも実施し、子どもの学びの成果や足跡を問う。

4 研究計画等

（1）前年度までの研究開発の概要

協力者会議報告「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」の内容を踏まえ、科学的思考の発達の具体的姿やその時期に育てたい力を明示した。具体的には、幼児の日常的な遊びや生活、小学校低学年の教科や領域などによる学習の様子をビデオ撮影によって記録し、数量についての感覚やかかわる力を培う教育課程試案を作成した。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p>協力者会議報告「幼児教育の教育と小学校教育との円滑な接続の在り方について」の内容を踏まえ、科学的思考の発達の具体的姿やその時期に育てたい力を明示する。</p> <p>具体的には、幼児の日常的な遊びや生活、小学校低学年の教科や領域などによる学習の様子をビデオ撮影によって記録し、文字や言葉、数量や図形、協同性などにカテゴライズするなどの分析を行い、遊びや学習の中で育てている力を明確にする。</p> <p>これまでの指導計画・教育課程実践の記録を分析し、反省考察して教育課程試案を作成する。</p>
第2年次	<p>本園の教育課程編成の理念を具現化し、科学的思考を培う環境へのアプローチや協同的な活動を踏まえ、数量の感覚が育つ姿や科学的思考力の育つ姿との関係性が見えるような接続期の教育課程・指導計画を作成する。</p> <p>また、幼児期と児童期をつなぐ接続期の教育課程として、幼児期からつながる接続期後半(第1学年)の育ちの見通しや指導内容・指導方法の工夫についても明確に示す。</p> <p>指導計画の実践事例を具体的に示す中で、「遊誘財」にこめられた指導の意図や内容、指導方法を活かしつつ、教材開発をおこなう。</p> <p>幼稚園と小学校の教員同士が幼児と児童の発達の姿を十分に理解し合い、見通しをもちながら、接続期の教育課程がより実効性の高いものとする。</p>
第3年次	<p>科学的思考を培う数量の感覚・図形の感覚、文字への関心や協同性が、月別指導計画や学習指導計画において見えやすく整理・修正する。</p> <p>接続期にふさわしい遊誘財や指導の展開例を明示し、実践例が汎化しやすいよう工夫する(遊誘財データベース)。接続期の幼児・児童理解や、指導内容・方法の見直しに有効な評価要素を整理し、提示する。</p> <p>具体的には次の通りである。</p> <p>①接続期後期(小学校1年生4～7月)の指導計画を「児童の発達の姿」「指導のねらい・内容」「環境の工夫や指導の要点」の視点から作成し、子どもの発達や学びの姿として示す工夫をする。</p> <p>②附属小学校における「生活学習」の実践例をまとめ、「幼稚園から滑らかに移行するための学習の展開」「発達に応じた教科学習」など、子どもの育ちや学びを位置付けた接続期の教育課程・指導計画を作成する。</p> <p>③幼児の発達の特性を生かした学びや数、量、言葉の捉え方とはどのようなものかということが伝わるような書き表し方など、表現方法を工夫して接続期の教育課程の評価要素を提案する。</p> <p>④遊誘財による指導の実践・展開例のデータベースを数量・図形・言葉や文字・協同性といった視点で整理し、幼児の科学的思考力を促す指導の参考となるようにする。</p> <p>⑤幼稚園・小学校の教師にとって、接続教育課程作成プロセスがどのような学びになっているかについて整理し、成果として示す。</p>

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	大学の教員や大学院生、学校関係者評価委員などによる研究の評価を実施するとともに、幼児とその保護者、低学年児童とその保護者によるアンケート調査から、幼児期、児童期に育っている力の評価を行う。
第2年次	本園の教育課程を修了した児童とそうでない児童との比較調査を行い、科学的思考や協同性について育っている力を質的に捉える。 大学の教員や大学院生、学校関係者評価委員などによる研究の評価から、接続期の幼児・児童理解や、指導内容・方法の見直しに有効な評価要素について検討する。
第3年次	公開研究会参加者、大学の教員や大学院生、学校関係者評価委員などから、次の3点について評価を受ける。 ①科学的思考を培う数量の感覚・図形の感覚、文字への関心や協同性が月別指導計画や学習指導計画において見えやすく整理されているか。 ②接続期にふさわしい遊誘財や指導の展開例を明示し、実践例が汎化しやすいよう工夫されているか。 ③接続期の幼児・児童理解や指導内容・方法の見直しに有効な評価要素であるか。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 幼児・児童の発達段階、能力・適性、興味・関心等の実態

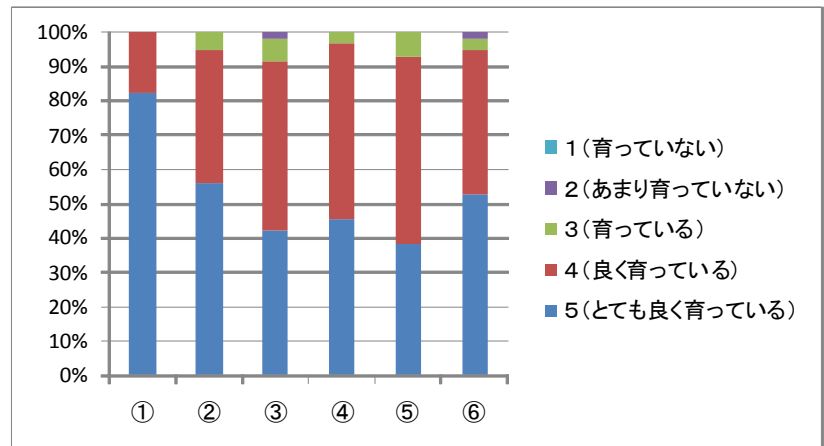
ア 保育観察や授業観察の後のカンファレンスにおいて、幼児や児童の身体発達や認知発達の面から適当であったと評価された。また、絵本「にじいろのさかな」（マークス・フィスター作 谷川俊太郎訳 講談社1995年）の読み聞かせとその後のディスカッションで本園の教育課程を修了した児童とそうでない児童との比較調査をした結果、協同性について顕著な差が表れた。本園修了生の多くは集団活動で目的を共有したり、協調的態度をとったり、人の意見を傾聴したり、友達の意見に関連させて発言したり等、協同的感性に優れていた。この結果から、本園教育課程の特徴として協同的感性を培う要素があることが考えられる。

イ 年長組保護者へのアンケート調査による教育課程の評価（平成24年1月実施）
本園の教育課程を構成する軸の視点から、修了前の年長児保護者に幼児の科学的思考力の育成についての評価アンケートを実施した。質問項目は以下の通りである。
①「わくわく ときどき」感動する心が育ってきている
②知的な喜びが身体や身体感覚を通して表れてきている。
③日本の衣食住のさまざまな共有体験が豊かになってきた。
④植物や動物など、自然とかかわりながら生活を豊かにしようとするようになってきた。
⑤科学的にもものを見たり考えたりしながら、生活の中のさまざまな問題を解決していこうとするようになった。
⑥友達や家族などのことを理解しようとしたり、人間関係を調整していこうとするようになってきた。

⑦その他、お子様の成長や幼稚園の教育環境のことでお気づきのことがあればお書きください。

ほぼ全ての質問で、「5. とても良く育っている」「4. 良く育っている」という回答があった。⑦の自由記述では、「物事を考えるときに『～だから…なんだ』と自分なりの思考をする場面がよく見られるようになりました。間違っていること

もありますが、子どもなりの発想に驚くことが良くあります」
 「『なぜだろう？何でこんな事が起こるの？』と物事の因果関係やつながりを見いだしている姿をよく目にするようになった」「物事に意欲的に取り組んだり、考えて試したり工夫したりする姿が見られるようになった。してみたいという気持ちになったとき、すぐ試したり作ったりできる環境が整っており、先生方も見守り支援してくれている」などがあった。



①「わくわくドキドキ」感動する心が育ってきているの項目においては、100%の保護者からよく育っているとの評価をいただいた。子どもたちは、動植物など自然とかかわる中で知的な喜びを感じ、生活が豊かになってきていることがわかる。このアンケート全般を通して、幼稚園の環境や教育内容について概ね良く育っているという保護者からの評価を得られたが、③と⑥について一人だけあまり育っていないという回答もあった。これには、周りの幼児との比較から年齢相応の発達がなされていないと判断したようなところも感じられた。自己評価ということでの我が子や子育てに対する反省的な回答なのか、あるいは実際に具体的な問題点があるのかについては無記名アンケートのため判断材料に欠けるが、今後の保育実践の中でもう一度個々の育ちを捉えなおすとともに保護者への説明も進め、問題の改善に努めたいと考える。

② 学年間、学校段階間の教育課程の一貫性・継続性

接続期における科学的思考の評価要素表を作成することで、幼児期後期の発達を見とる視点が明瞭になり、幼小の指導方法の共有化が可能となった。

科学的思考を促す幼小接続教育課程の評価要素表 —鳴門教育大学附属幼稚園方式—

遊誘財が遊びを誘発するプロセス⁽¹⁾

- ①子どもたちに好奇心や興味を刺激し
- ②子どもたちが自発的に対象を操作することで対象に変化を引き起こし
- ③その変化に「なぜだろう？」と考えることをはじめ
- ④何かの因果関係やつながりなどに気づきはじめ
- ⑤面白い、驚き、好奇心、感動が生まれはじめ
- ⑥繰り返すなかで知識や技術、思考方法を獲得しはじめ
- ⑦何度もそのような仮説（過程）を繰り返すことで、目的をもって取り組むことをはじめ
- ⑧目的が達成されると達成感や精神的充実感により自信や有能感をもちはじめ

- ⑨自分たちがどのような可能性をもっているかが分かりはじめ
- ⑩それらのサイクルが友達同士で行われることで、人間を理解し関係を創造（調整）する力が形成されはじめ
- ⑪協力や協同の能力が育ちはじめ
- ⑫組織・集団（社会）への参加することの大切さや必要性を身に付けはじめ など

科学的思考が促されている姿（表現）に対する評価要素の項目

※科学的思考を促す幼小接続教育課程の評価要素表を作成する上で、各評価の項目は、幼児の具体的な姿（表現）が上記プロセスから生み出された姿（表現）であることを基本とする。

<p>A 発見と問題解決</p>	<p>①好奇心・試行錯誤</p> <ul style="list-style-type: none"> ○美しいものや不思議なもの、未知のものなどに驚嘆したり、関心をもってかかわったりしようとする。 ○多様なものにかかわって、周囲の子どもたちや大人にたずねたり、自分で調べたり試したりしながら、試行錯誤する過程を楽しみ、そのものの特性に気付いたりする。 ○発見した喜びを味わったり、人に伝えたりして、意欲的に表現しようとする。 ○「なぜ、どうして」などと想像したり、自分のイメージで新しいものをつくり出そうとしたりする。 <p>②論理的に理由付けされた行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ○季節や天候にあわせて服や道具を使いこなす。（帽子・手袋・上着・雨傘など） ○使った遊具や用具を片付けるとき、正しい場所に置く。 ○遊びに必要なものをそれぞれの置き場所から取る。 ○最初と最後の様子や過去と現在の状態から、つながりや因果関係を考えたり予測したりする。 ○自然に触れる中で、ものの仕組みや法則に気付く。
<p>B 言葉への関心</p>	<p>①話すこと・聞くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ○人の話や絵本・図鑑、テレビや新聞などの情報から、自分の周りの出来事に関心をもつ。 ○うなずいたり相づちを打ったりしながら相手の話を聞き、「なるほど」と納得したりする。 ○主述をはっきりさせて自分の意見を言う。 ○出来事やものの特徴を、かかわっているものやことと結びつけながら、自分の言葉で説明する。 ○比喻や例を用いて話したり説明したりする。 ○しりとり遊びやなぞなぞ遊び、カルタ遊びを楽しむ。 ○好きな絵本がいくつかあり、その内容について意欲的に話そうとする。 ○絵本を読んだ後やその日のミーティングなど、話し合いに参加する。 ○トラブルが発生したとき、その理由を言葉で説明しようとする。 <p>②書くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ○書いてあることに注意を向けたり関心を示したりする。 ○自分の名前が分かり、平仮名で書ける。 ○書きたいと思い、文字や表示（ロゴ）などを見ながらまねて書く。 ○友達と一緒に、絵本や表現して遊べるものをつくったりすることを楽しむ。（手紙・看板・メニュー・標識・切符・券・名札・カードなど）
<p>C 数量と図形（平面・立体・空間）</p>	<p>①数理的な見方や考え方や表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ○対象を比べる <ul style="list-style-type: none"> ・並べたり、重ねたり、入れ替えたりして、長さや大きさや強さや早さなどを比べたりしながら、もの数（数量）を見つけ出す。 長い—短い（長さ）／大きい—小さい（体積）／多い—少ない（容積）／重い—軽い（重さ）／

- 強いー弱い（強さ）／早いー遅い（時間）／速いー遅い（速さ）／冷たいー熱い（温度）など
- ・ものの形（図・形・空間）の違っている所（共通・相違点）に気付く。
- 長いー短い（長さ）／高いー低い（高さ）／深いー浅い（深さ）／広いー狭い（面積）／丸いー角い（角度）など
- まとまりのある3つの群について、多少の区別をする。
（ $A > C > B$ ）／（ $A = B = C$ ）
- 毎日の欠席調べやけが調べで、誰も該当する人がいないときに0人だという表現や、お皿のクッキーを食べてしまったときに、全部無くなった（0個）と言うような表現を用いる。（0の概念形成）
- 人・個・本・枚など数詞を遣って話す。
- ～と比べて、～の方が、一番～など、関係を比較して表現する言葉を遣う。
- 今日の日付や曜日、現在の時刻を言ったり、時間や月日の順序を考えて話したりする。

②数えること・まとまりで把握すること（分離量や連続量）

- 生活の必要に応じて、事物を指さして数えたり、1対1対応させながら数える。
（例：30人くらいの人数に合わせる。縄跳びやおやつ作りなど）
- 求めに応じて、「〇〇を〇個」、「〇〇を〇個」、「〇〇を〇個」など、種類や数の違うものをとる。
- 前から〇人目、右から〇番目、下から〇段目など順序や位置関係が分かる。
- 学級の友達と人数やものの個数を意識しながら、テーブルセッティングをする。（カレーライスやクッキーなど）
- お茶や牛乳などの液体を、同じサイズのコップでほぼ同じ量につき分けようとする。
- ひもや紙やホットケーキなどを、同じくらいの長さや大きさに切ったり分けたりしようとする。

③図形（平面・立体・空間）

- 体（目・鼻・耳・口・頬・眉・額・髪・腕・足・手など）やものなどの部位を意識して全体をつくったり描いたりしようとする。
- 興味をもったいろいろなものを模写しようとする。（例：動植物や図や国旗や絵本など）
- 異なった形を区別して使用したり片付けたりする。（例：木の実や木の葉など自然素材や、ブロックや積み木・ままごと道具など分類して片付けたり使用するなど）
- 上から何段目、左から何番目など置き場所がわかる。
- 形や凹凸などの形状がきちんと当てはまるように注目しながら、作品や片付けを完成させることを喜ぶ。（ジグソーパズルや自作の遊具など）
- 折り紙を折ったり展開したりして器や立体をつくる。
- 真ん中や中心が分かって、バランスよくものをつくったり動かしたりする。
- 上下・左右・前後・斜めの空間的位置が分かり、動いたり人に伝えたりする。
- 積み木や空き箱・木片などを組み合わせて、家や基地、遊具などをつくる。

④パターンと組み合わせ

- ものの形（大きさ・長さ）や色の形状や特徴に応じて並べる。
- パターン化された6つくらいまでの物の数が直感でわかる。（例：トランプやサイコロの目）
- 並んだ絵の繰り返しに気付き、次にくるものを予測して楽しむ。
- カレンダーに関心もち、生活の中で意識したり使ったりする。
- 日常の生活のリズムをつかんで、活動を見通したり、準備や始末をしたりする。
- いくつかの特徴で事物を分けたり仲間（集合）作りをしたりする。
- 自分自身でパターンをつくって楽しむ。（例 ビーズや木の実のアクセサリー・ものを描いたり物語を書いたり・動きの表現の中で）
- 拍やリズムに興味をもって、まねたり、呼応したり、替え歌をつくったりする。

D 協同的感性

①協同的な言葉や表現

- 友達と一緒に歌ったり踊ったりして共鳴することを喜ぶ。
- 役割を分担したり、役に合わせた表現を工夫してごっこ遊びを楽しむ。
- 友達と活動の目的や目標などについて話し合う。
- 相手の意見と自分の意見の違いや共通点について気付き、話し合う。

②人間を理解し関係を調整する力(21項目)

○異質なものととの出会い

- ①自分の思うようにならないことを体験する。
- ②必要なときに、人に助けを求める。
- ③他者が「いや」という行為や事柄に関心をもつ。
- ④自分がされて嫌なことには、そのことを態度や言葉で表現する。
- ⑤嫌なことを受け流したり、距離をおいて付き合ったりする。
- ⑥自分と異なる行動や意見に対して考えるゆとりをもつ。

○異質なものへの興味や関心

- ⑦他者の行為や言葉に関心をもつ。
- ⑧他者の思い入れや思い入れのあるものに気付く。
- ⑨他者の言い分に真剣に耳を傾けて聞く。
- ⑩感情を含めた言葉や論理的な言葉で伝えたり説明したりする。
- ⑪他者の行為の意味について想像力を働かせる。

○他者との交流

- ⑫友達の遊びや活動に入ったり、友達を誘ったり、受け入れたりする。
- ⑬活動や遊びの中で、やりたいことをしたり、なりたい自分を表現したりする。
- ⑭イメージを共有したり、役割を分担したりしようとする。
- ⑮自分の気持ちや行動、他者からの評価などの変化に気付いたり関心をもったりする。
- ⑯自分や他者の良さに気付いたりそれを生かしたりする。
- ⑰自分と違うところをもつ人に憧れる。

○関係性をつくる

- ⑱友達や他者に共感したり応援したり励ましたりする。
- ⑲仲間のトラブルに介入したり、関係を調整したりする。
- ⑳緊張した場面をユーモアで和ませたり解決したりする。
- ㉑問題に対して創造的に解決しようとする。

低学年では生活科を中心とする生活学習の展開を図り、幼稚園から滑らかに移行するための学習の展開が進んだ。

③ 教科等間の連携性、関連性

幼小接続カリキュラムの具体としては、接続期を年長児Ⅱ期（9月）と1年生7月に設定し、次の2つの視点で取り組むことを考えている。一つが児童の興味や関心と教科の学習を連動させる国語科や算数科の実施であり、もう一つが横断的な教科学習の実施である。例えば、前期には、生活科の学校探検で見つけたものを数えることで算数科の単元「10までの数」を始めたり、見つけたもので平仮名を学ぶという国語科の単元「平仮名探検隊」などの学習である。また、後期には、カレンダーを作ることで算数科の単元「30までの数」を学習したり、幼小で一緒に収穫したサツマイモを大中小に分類することで算数科の単元「3つの数の計算」を行ったりするものである。他にも小学校の教員の専門性を生かした図工科や体育科などのカリキュラムも検討する予定である。教科の理論から入るのではなく、幼児や児童の興味・関心から入ることで、発達に応じた教科学習を始められた。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

評価要素表を提案することによって、接続期の発達を見とる視点や、指導のポイントが明確になったが、単に認知発達のチェック項目のような認識で捉えられないような説明が必要となる。科学的思考のデータベースを開発して、具体的な実践例を提示する試みを行なったが、さらに工夫が必要である。

1 草加市幼保小接続期プログラム作成の背景・現状・必要性

社会環境が変化する中で、教育現場では、小学校就学時などの、いわゆる接続期において、学校生活にうまく適応できず、集団行動がとれない、授業中に座ってられない、先生の話を受けないなどといった、いわゆる「小1プロブレム」といわれる状況が起きています。

草加市においても、平成26年度に、「草加市子ども教育の連携に関する教員・保育士アンケート調査」を行ったところ、21.0%の教員が「小1プロブレム」といわれる状況がみられる、と回答しています。

また、子どもたちの基本的な生活習慣の習得状況をみると、学年が上がるにつれて身に付いている内容もありますが、学年が上がっても身に付いていない内容もあります。学ぶ意欲や物事への関心については、学年が上がるにつれて意欲や関心が低下する傾向にあります。身近な自然の減少や、安心して遊べる空間が少なくなっていることにより、子どもたちが、直接的な体験や自然体験を積む機会が少なくなっています。

一方、幼稚園・保育園・小学校の交流・連携の現状としては、「草加市子ども教育の連携に関する教員・保育士アンケート調査」（平成26年度）によると、幼稚園では91.4%、保育園では83.0%、小学校では99.3%が交流・連携を行っている、と回答しています。

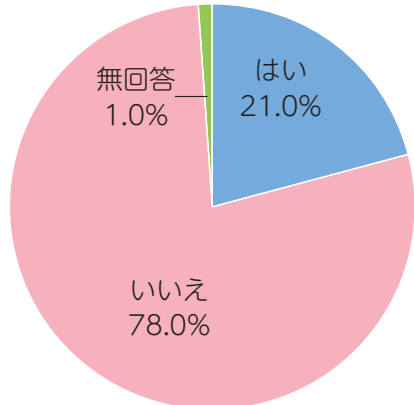
交流・連携の内容としては、「園児や児童による学校見学・授業体験」「活動(遊び)や学習を中心とした交流」が中心となっており、小学校以降の育ちの連続性を意識したカリキュラムを実施しているのは一部となっています。

以上のような、草加市における幼保小連携の現状を踏まえると、「小1プロブレム」などの課題を踏まえ、子どもたちが幼児期に「生きる力」の基礎をしっかりと育み、幼児期において育てた力を小学校の教育に確実につなげていくための取組を進めていく必要があります。また、幼保小が連携することにより、子どもたちの基本的な生活習慣の習得を継続して進めることや、直接的な体験や自然体験を積む機会を充実させることなどにより、子どもたちの意欲を高め、自信をもつことができるようにしていくことも重要です。これが、接続期プログラムが必要となる理由です。

【図1 「小1プロブレム」の発生状況】

あなたの学校では、今年度(平成26年度)、「小1プロブレム」といわれる状況がみられますか。

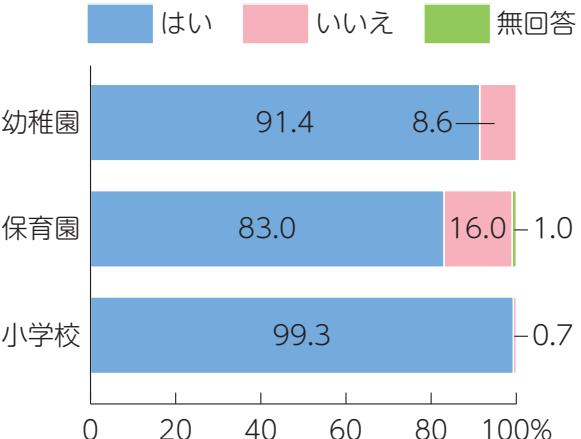
※「小1プロブレム」:入学したばかりの1年生の教室において、集団行動がとれない、授業中に座ってられない、先生の話を受けないなど、学校生活にうまく適応できない状態が続き、学級として機能しないこと。



「草加市子ども教育の連携に関する教員・保育士アンケート調査」（平成26年度）結果より

【図2 交流・連携の実施状況】

あなたの園又は学校では、平成25年度に、他の幼稚園・保育園・小学校・中学校のいずれか又はいくつかと交流・連携を行いましたか。



「草加市子ども教育の連携に関する教員・保育士アンケート調査」（平成26年度）結果より

2 草加市幼保小接続期プログラムとは

- 幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続を図るものであり、幼児期の学びを小学校の学びにつなげるためのものです。
- 接続期とは、5歳児10月から小学校1年生の1学期終了(7月)までとなります。
- 幼児期の終了前(5歳児の10月～3月)をアプローチカリキュラム、小学校1年生入学当初(小学校1年生1学期)をスタートカリキュラムとします。
- アプローチカリキュラムは、小学校教育に適応するために、小学校のカリキュラムの先取りをするものではなく、就学前までの幼児期にふさわしいものにすることが大切です。小学校という新しい環境に適応したり環境の変化を乗り越えたりしていく基礎となる力が培われる経験を、すべての子にさせるためのものとします。
- スタートカリキュラムは、幼児期の教育と小学校教育の違いによる段差を円滑にするために、配慮や工夫を行うものとします。

3 草加市幼保小接続期プログラムのねらい

目指す「草加っ子」(15歳の姿)を踏まえ、「就学までに身に付けたい力」を育てます。

目指す「草加っ子」(15歳の姿)

「自ら学び、心豊かに、たくましく生きる」草加っ子

自ら学び

- 基礎的、基本的な知識や技能を身に付け、活用することができる
- 意欲や目標をもって自分から活動や学習に取り組むことができる
- 人の話をしっかりと聞くことができる
- 自分の考えをしっかりと伝えることができる

たくましく

- 「早寝早起き朝ごはん」の習慣が身に付いている
- 時と場に応じた身だしなみを整えることができる
- 身の回りの整理整頓ができる
- みんなで使う場所をきれいにすることができる
- 見通しをもって生活し、時刻を守ることができる
- めあてをもって運動に取り組むことができる
- あきらめず、ねばり強く、ものごとに取り組むことができる

心豊かに

- 自分を大切な存在だと思えることができる(自己肯定感の育成)
- 他人を大切にし、思いやることができる
- 時と場に応じ、自分の感情を抑えたり我慢したりすることができる
- 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重できる
- 時と場に応じた、あいさつ、返事がきちんとできる
- ありがとう、ごめんなさいを素直に言うことができる
- 時と場に応じた、ていねいな言葉づかいができる
- 良いこと、悪いことの区別がつき、社会や学校、家庭のきまりを守ることができる
- 情報モラルを守り、メディアと適切にかかわることができる



生活する力
(たくましく)

規則正しい生活ができる

自分のことが自分でできる

(具体例)

- 「早寝早起き朝ごはん」の生活リズムが身に付いている
- 何でも残さず食べようとする
- 決められた時間内に着替えることができ、脱いだ服をたたむことができる
- 自分の工具箱やロッカーなどをきれいにすることができる
- 積極的に体を動かして、運動遊びを工夫して楽しみ、新しいことにもチャレンジすることができる
- 苦手なことにも一生懸命取り組み、できるまで頑張ろうとする

人とかわる力
(心豊かに)

思いや考えを言葉で伝えることができる

きまりや約束を守ることができる

(具体例)

- 自分ができていることに自信をもつことができる
- 相手の気持ちが分かり自分におきかえることができる
- 自分の気持ちに折り合いをつけることができる
- 自分からあいさつや返事ができる
- ありがとうやごめんなさいを素直に言えるようになる
- 良いことと悪いことの区別が分かり、きまりを守れるよう、考えながら行動できる

自ら学ぶ力
(自ら学ぶ)

さまざまな遊びや体験をする(体を動かす、自然とのふれあいなど)

文字や数に興味をもつ

(具体例)

- 文字や数に興味をもち、絵本を読んだり、図鑑などに興味を示す
- さまざまな活動に興味をもち、自分から積極的にかかわろうとする
- 話を聞くことの大切さが分かり、話している人の目を見て聞こうとする
- 自分の思いや考えを順序立てて伝えようとする

4 幼児期の教育と小学校教育の特徴

幼児期の教育

- 基本的な生活の単位が1日
- 興味、関心に応じた時間の配分により生活する
- 遊びを通して総合的に学ぶ
(体験・経験による学び)
- ねらいは方向性を示す
- 保育者が環境を構成しながら、幼児の環境へのかかわり方を支援する
- 一人ひとりの興味・関心に基づき活動が展開されるため、個やグループでの遊びや学びが多い
- 保育者や友達と話し言葉でかかわる

小学校教育

- 45分を1単位とする
- 時間割に基づいて生活や学習をする
- 教科を中心に系統的に学ぶ
(体験を論理的思考につなげる学び)
- ねらいは到達度を示す
- 教材を介して教師の指導助言により学習を進める
- 教師が全員に共通の教材や場を設定し、学級集団で学ぶことが多い
- 教師や友達と、話し言葉に加え書き言葉(読む、書く)でもかかわる

【小学校入学当初の児童からみた小学校のイメージ】

生活

遊び中心の幼稚園・保育園での生活から、学習中心の生活への変化
通学班により、自分で登校する

時間

授業時間、休み時間など、時間の区切りがある

施設

幼稚園や保育園と比べ、体育館や校庭などの施設が大きい
幼稚園や保育園では、床や壁などがやさしい色ややわらかい形のものが多かったが、小学校では、教室、机・椅子、ロッカーなどの色や形、素材が硬い雰囲気のものが多い

人間関係

複数の幼稚園や保育園から集まった、初めての集団

言葉

幼稚園・保育園の先生と小学校の先生とでは、同じものを指す言葉が異なる場合があり、言葉の意味や自分に向けられたものであることが分からない場合がある

2 幼児期の教育において小学校の学びの基盤となる経験

5歳児

10月

11月

12月

生活する力

- 戸外で友達と一緒に十分に体を動かして活動する
- 危険な場所が分かり、安全に気を付けて行動する
- 栽培、収穫、簡単な調理を通して食べ物に関心をもつ
- 先を見通し、時間を意識しながら友達と声をかけ合って生活する
- 健康な生活や病気の予防に関心をもち、意識して行動する
- 生活に必要な活動を自分から進んでする
- 困った時は自分で考えたり、周りの人に聞いたりする
- 自分の持ち物の整理や脱いだ服の始末を進んで行う
- 自分で必要性を感じながら、園やクラスのもの片付ける
- 共同で使う遊具を大切に使う

人とかかわる力

- 自分の経験したことや考えたことを相手に分かるように話す
- 地域の人や高齢者、異年齢の子どもとふれ合い、人の役に立つ喜びなどを味わう
- 生活の場に応じた言葉の使い方や表現の仕方が分かる（あいさつ、返事、ありがとう、ごめんなさい等）
- 問題が生じたとき、自分たちで解決しようとする
- 友達と話し合いながら、自分たちで遊びを進めていく
- 友達の話をよく聞き、相手に分かるように話す
- 友達と遊びのイメージを共有し、思いや考えを言葉で伝えようとする
- 遊びの中で友達のいろいろなよさを認め合う
- 友達とのかかわりや生活を通して、きまりの必要性や大切さが分かる
- 集団行動（運動会、遠足）を意識して、皆と一緒に行動する
- 公共施設（図書館、公園、児童館など）を利用し関心をもつ
- 友達と役割を分担したり、交代したりしながら遊ぶ楽しさを味わう
- 活動に合わせてルールを考えたり、工夫したりしながら遊びを楽しむ
- 良いことと悪いことを自分で考えて行動する

自ら学ぶ力

- 秋の自然物を積極的に遊びに取り入れれたり、物の仕組みに関心をもって使ったりし、生活を豊かにする
- 飼育動物や昆虫等の世話を通して、生態や飼育方法を調べる（絵本、図鑑、事典など）
- 季節の変化に関心をもち、遊びに取り入れれたり興味をもって調べたりする
- 身近な環境に積極的にかかわり、生活の中に取り入れようとする
- 遊びに使う物の数、人数、数量を数えたり、比べたりする
- 遊びに使う簡単な標識や文字、数字に興味をもったり、読んだりする
- 文字や数を遊びの中に取り入れる
- 物語や話の続きに興味をもち、クラスの友達と楽しんで聞く
- 友達と一緒にリズムカルな動きを楽しむ
- 絵本や物語などを通して、イメージを豊かにする
- 絵本や物語に親しみ、イメージを膨らませたり、演じたりして遊ぶ

1月

2月

3月

- 活動の区切りや時間を意識しながら生活する
- 就学への期待をもち、自信をもって行動する
- 友達とルールを考えながら、十分に体を動かす遊びに取り組む
- 危険な遊び方や場所に気付き、自分で判断して安全に行動しようとする
- 健康な生活に興味をもち、生活に必要な習慣やリズムを身に付ける（※ハンカチの使用、午睡なしでの生活への切替）
- 自分の遊びや生活の場を整えようとする
- 自分たちの活動を振り返りながら、当番の仕事の引継ぎをする

- 大勢の友達と目的を共有し、保育者や友達と相談しながら見通しをもって進める
- 目的に向かって課題に根気強く取り組んだり、工夫したりしてやり遂げた喜びや充実感を味わう
- 友達と共有した目的を実現するために、言葉で伝える
- 友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ
- 共通の課題に向けて挑戦したり、話し合ったり、役割を分担したりして、目的を果たす喜びを味わう
- クラス全体で一つの活動などに取り組んだり、共通のイメージをもってそれぞれの遊びをつなげたりする
- 遊びや活動の中で友達の意見を尊重したり、優先したり、折り合いをつけたりする

- 冬の自然現象に興味をもち、見たり試したりする
- 季節の移り変わりとともに生活にも変化があることを知る
- 文字を使うことの楽しさや意味に気付き、生活の中で文字を使って伝える喜びを味わう
- 生活の中で数の必要性や便利さに気付き、書いたり、読んだり、比べたり、分けたりする
- 伝承遊びにふれたり、伝統行事の意味を知ったりして、親しむ
- 就学することを喜び、自分の成長に自信と自覚をもつとともに、身近な人に感謝の気持ちをもつ
- 考えたこと、感じたことをいろいろな方法で表現する